

住吉宮町遺跡

第56次発掘調査報告書

2 0 2 4

神戸市

住吉宮町遺跡

第56次発掘調査報告書

2 0 2 4

神戸市

住吉宮町遺跡第56次発掘調査報告書 訂正表

ページ	訂正箇所	訂正前	訂正後
序	1行目	住吉本町7丁目	住吉宮町7丁目
6	5行目	掘建柱建物	掘立柱建物
12	図4スケールバー	20m	5m
14	図6スケールバー	20m	5m
15	3~4行目	内塊	内湾
18	図11スケールバー	20m	5m
20	図13キャプション	Scale 1:100	Scale 1:80
20	3行目	前方後円墳	前方部
20	6行目	墳丘墳裾	墳丘裾
24	図18スケールバー	1:200	1:20
25	図20スケールバー	20m	5m
30	31~32行目	現状ではが不明と	現状では不明と
32	14行目	極低い	極めて低い
32	17行目	埋葬移設	埋葬施設
32	18行目	住吉古墳群	住吉宮町古墳群
33	図27凡例	黒塗:東支郡	黒塗:東支群
33	図27凡例	白抜:西支郡	白抜:西支群

序

本書は、神戸市東灘区住吉本町7丁目に所在する住吉宮町遺跡における第56次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

住吉宮町遺跡は、六甲山系から流れる河川がもたらした複合扇状地上に営まれた集落遺跡および古墳群の遺跡です。1985（昭和60）年に初めて発掘調査が行われて以降、弥生時代～中世にかけて人々が居住した遺跡であることがわかっています。また、5世紀以降には、小型でありながらも、多くの古墳が築かれていたことも判明しています。

今回の発掘調査は、保育園増築に伴って実施されたもので、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の古墳、飛鳥時代の竪穴建物および掘立柱建物、平安時代の耕作痕跡が発見されました。特筆されるのは、今回発見された古墳が、これまで住吉宮町遺跡で発見されている古墳のなかでは大型の古墳であることです。これにより、本遺跡の往時の姿を解明するための大きな手がかりを得たと言えます。

発掘調査後、発見された古墳の大部分は、埋め戻され現地にて保存されることとなりました。今後、地域の歴史を知るための重要な役割を果たしてくれると期待しております。

最後になりましたが、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

2024（令和6）年3月
神戸市

例　　言

1. 本書は神戸市東灘区住吉宮町 7 丁目 2 番 6 号に所在する、住吉宮町遺跡第 56 次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は保育園舎増築工事に伴うもので、神戸市文化スポーツ局文化財課が神戸市こども家庭局から委託を受けて、令和 3 年 3 月 1 日から令和 3 年 6 月 18 日の期間で実施した。発掘調査面積は 310m²、延べ調査面積 1,060m²である。現地での調査は令和 3 年 3 月 1 日から 4 月 14 日までは小野寺洋介が担当し、同年 4 月 15 日からは内藤俊哉、田島靖大が、5 月 11 日からは中井菜加を加え担当した。出土遺物の整理作業は、令和 3 年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、佐伯二郎が担当した。
3. 本書は、第 1 章、第 2 章、第 3 章第 3 節の図面の作成および記述については内藤の協力を得て中井が、第 2 章の遺物実測および記述、第 3 章第 1 節・2 節、第 4 章の記述については小野寺が担当し、編集は中井・小野寺が担当した。
4. 現地での遺構等の写真は調査担当者と中村大介が撮影した。遺物写真については西大寺フォト 杉本和樹氏に委託し、神戸市埋蔵文化財センターで撮影した。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図「西宮」、神戸市発行の 2,500 分の 1 都市計画図「住吉」を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標の世界測地系第 V 系座標で、標高は東京湾中等潮位 (T.P.) で示した。
7. 調査地の空撮および写真測量による基本図化 (1/50) は写真測量によっておこない、(株) G E O ソリューションズ神戸営業所に委託して実施した。
8. 出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 遺物実測図は、弥生土器・土師器・埴輪は断面白抜き、須恵器は断面黒塗り、黒色土器は内面を灰色 40% 濃度、埴輪赤色は灰色 20% 濃度としている。
10. 出土遺物の年代観は、参考文献に記載した出典を参照している。
11. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、神戸市こども家庭局ならびに社会福祉法人住吉むつみ会に多大なるご協力を頂いた。記して感謝を申し上げます。

目 次

序
例言
目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査体制.....	1
3. 調査の経過.....	2
第2節 住吉宮町遺跡の地理的環境と歴史的環境.....	3
1. 地理的環境.....	3
2. 遺跡の歴史的環境.....	4
3. 既往の調査成果.....	7
第2章 発掘調査の成果.....	11
第1節 調査の概要.....	11
第2節 基本層序.....	11
第3節 第1遺構面 平安時代.....	12
1. 第1遺構面の遺構と遺物.....	12
第4節 第2遺構面 飛鳥時代.....	14
1. 第2遺物包含層の遺物.....	14
2. 第2遺構面の遺構と遺物.....	15
第5節 第3遺構面 古墳時代中期.....	18
1. 第3遺構面の遺構と遺物.....	18
第6節 第4遺構面 弥生時代後期.....	25
1. 第4遺構面の遺構と遺物.....	26
第3章 まとめ—住吉宮町遺跡第56次調査の成果概要—.....	30
第1節 各時代の遺構.....	30
第2節 1号墳の住吉宮町古墳群における位置付け.....	31
第3節 1号墳の現地保存.....	33
第4章 おわりに.....	34

写真図版

報告書抄録

図版目次

図 1 調査地位置図	3	図 15 1号墳 (SZ301) 周溝出土遺物実測図 (2)	22
図 2 周辺遺跡分布図	5	図 16 2号墳 (SZ302) 平面および周溝断面図	23
図 3 住吉宮町遺跡調査地位置図	8	図 17 2号墳 (SZ302) 出土遺物実測図	23
図 4 第1遺構面平面図	12	図 18 ST301 平・断面図	24
図 5 SP110 出土遺物実測図	13	図 19 第4遺構面包含層出土遺物実測図	25
図 6 第2遺構面平面図	14	図 20 第4遺構面平面図	25
図 7 第2遺物包含層および遺構面出土遺物実測図	15	図 21 第4遺構面出土遺物実測図	26
図 8 SB201 平・断面図および遺構図	16	図 22 SB401 平・断面図	27
図 9 SB201 出土遺物実測図	17	図 23 SB401 出土遺物実測図 (1)	28
図 10 SB202 平・断面図	17	図 24 SB401 出土遺物実測図 (2)	28
図 11 第3遺構面平面図	18	図 25 1号墳墳丘築造過程模式図	31
図 12 1号墳 (SZ301) 平面および見通し図	19	図 26 住吉宮町古墳群の古墳分布図	32
図 13 壁断面図	20	図 27 住吉宮町古墳群の年代ごとの古墳数	33
図 14 1号墳 (SZ301) 周溝出土遺物実測図 (1)	21	図 28 現地保存した古墳の範囲	33

表目次

表 1 住吉宮町遺跡既往調査一覧表	9	表 3 出土鉄器および石器観察表	29
表 2 出土遺物観察表	29		

挿図写真

写真 1 現地説明会	2	写真 4 SP110 土器出土状況	13
写真 2 遺物整理作業	2	写真 4 土囊および真砂土による養生作業	33
写真 3 調査区周辺写真	11		

写真図版目次

カラー図版 1	図版 6
1. 1号墳 (SZ301) 全景 (北東から)	1. 2号墳 (SZ302) 全景 (南西から)
カラー図版 2	2. ST301 全景 (北東から)
1. 1号墳 (SZ301) 全景 (北西から)	3. SB401 全景 (南西から)
2. 第56次調査出土古墳時代遺物	図版 7
図版 1	1. SP110 出土土器
1. 第1遺構面全景 (北西から)	2. SB201 出土土器 (1)
2. 第2遺構面全景 (北西から)	3. SB201 出土土器 (2)
3. SB201 土器出土状況 (南東から)	4. SB201 出土土器 (3)
図版 2	5. SB201 出土土器 (4)
1. SB201 全景 (北から)	図版 8
2. SB202 全景 (北から)	1. 1号墳 (SZ301) 周溝出土土器 (1)
3. 第3遺構面全景 (北から)	2. 1号墳 (SZ301) 周溝出土土器 (2)
図版 3	3. 1号墳 (SZ301) 周溝出土土器 (3)
1. 第3遺構面空中写真 (俯瞰モザイク写真)	4. 1号墳 (SZ301) 周溝出土土器 (4)
図版 4	5. 1号墳 (SZ301) 周溝出鉄器
1. 1号墳 (SZ301) 全景 (北西から)	6. 1号墳 (SZ301) 周溝出土鉄器レントゲン写真
2. 1号墳 (SZ301) 全景 (西から)	図版 9
図版 5	1. 1号墳 (SZ301) 周溝出埴輪
1. 1号墳 (SZ301) 周溝内土器出土状況 (北から)	2. 第2遺物包含層出土土器
2. 1号墳 (SZ301) 周溝西側土層断面 (北西から)	3. 第4遺構面出土土器
3. 1号墳 (SZ301) 墳丘上段立ち割り状況 (北から)	4. SB401 出土土器 (1)
4. 1号墳 (SZ301) 墳丘下段立ち割り状況 (西から)	5. SB401 出土土器 (2)
5. 1号墳 (SZ301) 墳丘オルソ写真 (西から)	6. SB401 出土土器 (3)
6. 1号墳 (SZ301) オルソ写真 (北から)	7. SB401 出土台石
	8. 第4遺構面出土石器

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

住吉宮町遺跡第56次調査は、神戸市東灘区住吉宮町7丁目2番6号において令和2年度および3年度に実施したもので、保育園舎増築工事を契機とする。試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲約310m²について、令和3年3月1日から令和3年6月18日まで発掘調査を実施した。令和3年度に遺物整理を、令和5年度に発掘調査報告書の作成を行った。

2. 調査体制

神戸市文化財保護審議会 史跡 考古資料担当

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長 菱田哲郎 京都府立大学文学部教授

令和2年度 現地調査

神戸市文化スポーツ局

局長	岡田健二	文化財課担当係長	松林宏典
副局長	宮道成彦	同（保存科学・整理担当）	中村大介
文化財課長	安田 滋	事務担当学芸員	瀬瀬文佳
埋蔵文化財センター担当課長	前田佳久	調査担当学芸員	小野寺洋介
埋蔵文化財係長	東喜代秀	遺物整理・保存科学担当学芸員	山田侑生
文化財課担当係長	斎木 巖		

令和3年度 現地調査・出土遺物整理

神戸市文化スポーツ局

局長	加藤久雄	文化財課担当係長（保存科学担当）	中村大介
副局長	宮道成彦	事務担当学芸員	荒田敬介
文化財課長	安田 滋	調査担当学芸員	内藤俊哉
埋蔵文化財センター担当課長	前田佳久	同	中井菜加
埋蔵文化財係長	東喜代秀	同	田島靖大
文化財課担当係長	橋詰清孝	遺物整理担当学芸員	佐伯二郎
同	松林宏典	保存科学担当学芸員	山田侑生

令和5年度 報告書作成

神戸市文化スポーツ局

局長	宮道成彦	埋蔵文化財係長	阿部 功
副局長	三宅正人	同（保存科学担当）	中村大介
文化財課長	平井勝彦	事務担当学芸員	小野寺洋介
埋蔵文化財センター担当課長	松林宏典	報告書作成担当学芸員	中井菜加
埋蔵文化財係長	橋詰清孝	遺物整理担当学芸員	加納大誉
同	山口英正	保存科学担当学芸員	山田侑生

3. 調査の経過

令和2年2月25日に実施した試掘調査の結果を受けて、令和3年3月1日より発掘調査を開始した。まず、調査に先立ち、埋蔵文化財に影響のない表土の地表構造物や樹木の除去を行った。3月3日より調査区南側から重機掘削を開始し、順次人力による第1遺構面の検出作業を実施した。3月11日に重機掘削が完了し、遺構面の精査、遺構掘削、図化作業を実施、3月22日に第1遺構面の全景写真を撮影した。3月23日より第2遺物包含層の掘削を開始し、3月24日に南側で古墳の葺石（1号墳）を、3月29日に北側で低墳丘の古墳（2号墳）を検出した。3月30日に1号墳周溝内堆積層上面で掘立柱建物を構成する飛鳥時代のピットを検出した。4月1日にカマドをもつ飛鳥時代の竪穴建物を検出、掘削、図化作業を行い、4月2日に第2遺構面の全景写真を撮影した。その後、1号墳・2号墳の調査と、第3遺物包含層の掘削を開始した。

4月14日まで小野寺が調査を担当し、4月15日以降は内藤・田島が担当した。4月24日に現地説明会を実施し、250人を超す見学者が来場した。4月26日に古墳時代の遺構面である第3遺構面で箱式石棺1基を検出した。4月27日に1回目の写真測量を実施した。5月7日に飛鳥時代の竪穴建物の下層で、第4遺構面に属する弥生時代後期の竪穴建物を検出した。5月11日から中井が調査に合流した。5月28日に全景写真を撮影し、第4遺構面の調査を終了した。5月31日、6月1日にかけて1号墳の断ち割りトレンチを掘削、順次写真撮影、断面図図化作業を行った。6月2日に2回目の写真測量を実施し、断ち割りトレンチの撮影を行った。6月3日に1号墳を土嚢、真砂土で墳丘表面を養生し、埋め戻しを行った。6月7日から11日まで建物建設に伴うボーリング調査のため現場作業が一時中断し、6月18日に調査区全ての埋め戻しが完了した。

8月23日からは1号墳墳丘東側延長部のフェンス撤去工事の際に、立会調査を実施した。8月24日に3回目の写真測量を実施し、現地での調査を終了した。

出土遺物の整理作業は、すべて神戸市埋蔵文化財センターで実施した。遺物の水洗作業を実施した後、出土情報のマーキング、接合作業を行った。遺物撮影が必要な資料は彩色を行い、令和3年12月7日に遺物写真撮影を実施した。令和5年度に出土遺物の図化および図版の作成を行い、令和6年3月に本報告書を刊行した。



写真1 現地説明会



写真2 遺物整理作業

第2節 住吉宮町遺跡の地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

住吉宮町遺跡は、六甲山系南麓地域に位置する神戸市東部の東灘区に所在する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡の範囲は、本住吉神社付近を中心として、住吉宮町3・4・6・7丁目、住吉本町1・2丁目、住吉東町2・4丁目の東西約800m、南北約600mに及んでいる。

六甲山系は、風化しやすい花崗岩で形成されており、山地から流れ出る複数の中小河川によって土砂が運搬され、山麓部に堆積することによって扇状地が形成される。住吉宮町遺跡は、石屋川や住吉川によって形成された標高20m前後の複合扇状地上に立地する[1]。

これまでの調査で幾層もの洪水砂層や洪水時の流路・土石流を確認しており、第47次調査では1938（昭和13）年の阪神大水害による洪水堆積層を確認している[2]。また、当遺跡内で5世紀代に築かれた古墳群は、6世紀初頭以降、7世紀までの間に洪水の土砂によって埋没したことが明らかになっており、往時の災害状況を現在に伝えている[3]。



図1 調査地位置図

2. 遺跡の歴史的環境

六甲山系南麓地域は、市内でもとくに遺跡が集中する地域である。以下、住吉宮町遺跡周辺の主な遺跡について、概要を記す。なお、() は図2の番号に、[] は参考文献の番号に対応する。

旧石器時代　当時期の遺跡は少なく、後期旧石器時代のナイフ形石器を本山遺跡（15）[4]、西岡本遺跡（10）[5]、岡本北遺跡（9）[6]、滝ノ奥遺跡[7]において発見している。

縄文時代　草創期の有茎尖頭器が本山遺跡および滝ノ奥遺跡[7]で発見されている。早期には、本山遺跡から押型文土器である神宮寺式土器が出土している[4]。西岡本遺跡では、前期の高山寺式の時期に属する竪穴建物が発見されている[5]。晚期後半には、北青木遺跡、森南町遺跡、本山遺跡、本庄町遺跡で突帯文土器が出土している[8]。

弥生時代　縄文時代晚期から集落が継続する本山遺跡では、前期初頭の土器とともに農耕具等の木製品が発見され、農耕文化の開始期における稻作集団の定着を示している[9]・[10]。以後、本山遺跡は当該地域の拠点的集落として発展していく。北青木遺跡（17）では前期中葉の土器とともに農耕具や斧柄、石包丁が出土している[11]。

中期には本山遺跡、森北町遺跡（27）、住吉宮町遺跡（1）で集落が形成される。北青木遺跡では、中期後半に方形周溝墓・土器棺墓など墓域としての利用が始まる。中期後葉には丘陵上にも集落が形成され、東山遺跡（24）[12]、保久良神社遺跡（21）[13]、金鳥山遺跡（23）[14]、滝ノ奥遺跡、荒神山遺跡（11）[15]、芦屋市会下山遺跡（26）[16]などの高地性集落が営まれる。また、この地域は桜ヶ丘銅鐸・銅戈[17]、保久良神社銅戈[18]、本山銅鐸（16）[19]、北青木銅鐸（18）[20]、森銅鐸（25）、生駒銅鐸（22）[21]など、青銅器祭器の埋納地が密集しているのも特徴的である。

後期になると、郡家遺跡（4）で集落が形成される。深江北町遺跡（30）[22]、住吉宮町遺跡[23]、北青木遺跡[24]では、後期から古墳時代初頭の円形周溝墓や方形周溝墓が確認されている。また、森北町遺跡では、前漢鏡片が出土している[25]。

古墳時代　前期には、海岸沿いで前方後方墳である西求女塚古墳を始めとし、処女塚古墳[26]、前方後円墳である東求女塚古墳（5）[27]、扁保曾塚古墳（14）[28]の順に大型の古墳が築造される。

中期には、住吉宮町遺跡内で、5世紀初頭に方墳、5世紀前半～中頃に前方後円墳である坊ヶ塚古墳（2）[29]、5世紀末に帆立貝形をした住吉東古墳（3）[30]が築造され、その後方墳を主体とする古墳群が形成される。

後期の古墳としては岡本梅林古墳群（13）、西岡本遺跡などで、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が形成される。また、郡家遺跡において単独の石室墳が発見されている。

集落としては、弥生時代後期から継続している遺跡も多く、郡家遺跡・森北町遺跡・住吉宮町遺跡などがあげられる。



- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|------------|------------|
| 1. 住吉宮町遺跡 | 2. 坊ヶ塚古墳 | 3. 住吉東古墳 | 4. 郡家遺跡 | 5. 東求女塚古墳 |
| 6. 御影郷古酒蔵群 | 7. 魚崎郷古酒蔵群 | 8. 魚崎中町遺跡 | 9. 岡本北遺跡 | 10. 西岡本遺跡 |
| 11. 荒神山遺跡 | 12. 岡本東遺跡 | 13. 岡本梅林古墳 | 14. 扁保曾塚古墳 | 15. 本山遺跡 |
| 16. 本山銅鐸出土地 | 17. 北青木遺跡 | 18. 北青木銅鐸出土地 | 19. 小路大町遺跡 | 20. 井戸田遺跡 |
| 21. 保久良神社遺跡 | 22. 生駒銅鐸出土地 | 23. 金鳥山遺跡 | 24. 東山遺跡 | 25. 森銅鐸出土地 |
| 26. 会下山遺跡 | 27. 森北町遺跡 | 28. 寺田遺跡 | 29. 本庄村遺跡 | 30. 深江北町遺跡 |

図2 周辺遺跡分布図

第2節 住吉宮町遺跡の地理的環境と歴史的環境

中期には、郡家遺跡で韓式系土器が出土しており、渡来系氏族との関連が示唆される[31]。また、森北町遺跡でも韓式系土器が出土している[25]。

奈良時代～平安時代　律令制度が施行されると当該地域周辺は摂津国菟原郡に属するようになる。住吉宮町遺跡では、掘立柱建物や井戸等が検出、土馬や「橋東家」「免」と書かれた墨書き土器が出土している。西に隣接する郡家遺跡では掘建柱建物群が検出され、菟原郡衙の推定地とする説もある[32]。一方、芦屋市寺田遺跡(28)では奈良時代の倉庫遺構と、郡司の等級を表す「大領」「小領」と書かれた墨書き土器が発見されていることから、菟原郡の郡領氏族との関係が示唆されている[33]。また、深江北町遺跡では「驛」と書かれた墨書き土器や木簡が出土しており、山陽道に設置された「葦屋驛家」またはそれに関連する施設の存在が示唆されるが、驛家の施設と断定できる明確な遺構はいまだ確認できていない[34]。そのほか、小路大町遺跡(19)では農耕祭祀が行われたと考えられる遺構が発見されており、馬鍔、ヒョウタンが出土している[35]。

中世～　江戸時代中期以降は酒造業が隆盛を迎え、海浜部に魚崎郷古酒蔵群(7)[36]、御影郷古酒蔵群(6)[37]が形成される。

註

- [1] 田中眞吾 2004 「大地の成り立ち」『本庄村史 地理編・民俗編 - 神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ -』 本庄村史編纂委員会
- [2] 口野博史 2013 「住吉宮町遺跡第47次調査」『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [3] 安田滋・菅本・千種・中村・平田 2001 『住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- [4] 安田滋・藤井整 1999 『本山遺跡第20次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [5] 浅岡俊夫 2001 『神戸市東灘区西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会
- [6] 浅岡俊夫 1992 『神戸市東灘区岡本北遺跡』六甲山麓遺跡調査会
- [7] 黒田恭正・阿部敬生 1994 「滝ノ奥遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [8] 丸山潔(編) 2015 『縄文時代のこうべ - 1万年の記憶 -』神戸市教育委員会
- [9] 安田滋 1998 「本山遺跡第17次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [10] 神戸市教育委員会 1997 『「発掘された日本列島'97」地域展示 ひょうご復興の街から』
- [11] 山下史朗 1986 『北青木遺跡』兵庫県教育委員会
- [12] 宮本郁雄 1987 「本山町東山遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [13] 新修神戸市史編集委員会編 1989 「保久良神社遺跡」『新修神戸市史』歴史編I自然・考古
- [14] 新修神戸市史編集委員会編 1989 「金鳥山遺跡」『新修神戸市史』歴史編I自然・考古
- [15] 阿久津久 1970 『荒神山遺跡調査概報』神戸市教育委員会
- [16] 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 『増補会下山遺跡』芦屋市教育委員会
- [17] 三木文雄他 1966・1969 『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第1冊 兵庫県教育委員会
- [18] 橋口清之 1942 「攝津保久良神社遺跡の研究」『験杉会紀要』第四輯 国学院大学験杉会
- [19] 丹治康明・須藤宏 1991 『本山遺跡』神戸市教育委員会
- [20] 東喜代秀 2009 「北青木遺跡第5次調査」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
千種浩 2012 『北青木銅鐸』神戸市教育委員会
- [21] 村川行弘 1965 「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土銅鐸」『考古学雑誌』51-2
- [22] 兵庫県教育委員会 1988 『深江北町遺跡』兵庫県文化財調査報告書 54
- [23] 本書 調査一覧参照
- [24] 川上厚・井上麻子 2014 『北青木遺跡 第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- [25] 黒田恭正 1988 「森北町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [26] 神戸市教育委員会 1985 『史跡処女塚古墳』
- [27] 渡辺伸行 1985 「東求女塚古墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [28] 梅原未治 1925 「武庫郡本山村マンバイのヘボソ塚古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書第二輯』兵庫県
- [29] 渡辺昇・高瀬一嘉 1989 『坊ヶ塚遺跡(住吉宮町遺跡群II)』兵庫県教育委員会
- [30] 丹治康明・東喜代秀・須藤宏・橋詰清孝 1994 「住吉宮町遺跡第9次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会

- [31] 丸山潔 1989「郡家遺跡城の前地区第 23 次調査」『昭和 61 年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
丸山潔 1990「郡家遺跡城の前地区第 24 次調査」『昭和 62 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
石島三和 2008『郡家遺跡第 83 次調査』神戸市教育委員会
- [32] 神戸市教育委員会 1980「郡家大蔵遺跡（昭和 53・54 年度）」『地下にねむる神戸の歴史展』
神戸市教育委員会 1979「郡家大蔵遺跡」『現地説明会資料』
- [33] 芦屋市教育委員会 2014「寺田遺跡 第 90 地点」『芦屋市文化財調査報告 97：平成 8 年度国庫補助事業（2）
芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』
- [34] 須藤宏 2002「深江北町遺跡第 8 次調査」『平成 11 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
山本雅和（編）2002『深江北町遺跡第 9 次埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
谷正俊（編）2014『深江北町遺跡第 12・14 次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
谷正俊（編）2018『深江北町遺跡第 17 次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- [35] 井尻格 2003『小路大町遺跡第 4 次調査報告書』神戸市教育委員会
- [36] 関野豊 2001「魚崎郷古酒蔵群第 1 次調査」『平成 10 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
佐伯二郎 2001「魚崎郷古酒蔵群第 2 次調査」『平成 10 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [37] 井尻格 2004『御影郷波がえし蔵一御影郷古酒蔵群第 2 次発掘調査の記録一』神戸市教育委員会
黒田恭正（編）2007『御影郷古酒蔵群第 4 次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

3. 既往の調査成果

住吉宮町遺跡は 1985（昭和 60）年の共同住宅建設中に不時発見されて以来、2021（令和 3）年まで 56 次にわたる調査が行われている。

これまでの調査で確認された最古の遺物は縄文時代晚期の土器だが、遺構は確認されていない（第 51 次）。弥生時代中期から集落の形成がはじまり、後期に拡大し、庄内式併行段階になると周溝墓（第 5・7・9 次）・土器棺墓等が発見されている。

古墳時代前期初頭に一度集落は途絶えるが、古墳時代中期になると、5 世紀初頭に築造された方墳（第 52 次）や 5 世紀前半から中頃築造と考えられる坊ヶ塚古墳、5 世紀末頃築造の住吉東古墳（第 9 次）の盟主墳を中心に、5 世紀から 6 世紀中頃にかけて住吉宮町古墳群が造られる。古墳群は一辺 10 m～20 m の方墳で形成され、中には円筒埴輪が廻るもの、形象埴輪を持つもの、墳丘斜面に葺石を葺くものが見られる。第 55 次調査までに 81 基の古墳が発見されているが、実際には 100 基以上の古墳が築造されていたと考えられ、これらの古墳の多くは度重なる土石流によって埋没した状態で発見された。また、古墳の周囲や周溝内から墳丘を伴なわない箱式石棺も確認されており（第 4・5・19・32・56 次）、古墳の被葬者との階層差が伺える。第 55 次調査までに 16 基（第 17 次調査 3 号墳を含めると 17 基）確認されている。

遺跡の範囲内では、墓域とともに集落域も形成されており、第 9 次調査や第 53 次調査では古墳時代中期から後期にかけて竪穴建物や掘立柱建物がまとまって確認されている。第 45・47 次調査では中期の水田状遺構が確認されている。

奈良時代になると掘立柱建物が多数確認されており、第 23 次調査では奈良時代の井戸が 1596 年に発生した慶長伏見地震によって崩れた状態で発見された。井戸からは円面硯や瓦の他、「橘東家」「免」と書かれた 8 世紀後半から末頃の土師器の壊などが出土しており、隣接する郡家遺跡とも関連して摂津国菟原郡衙との関係がうかがえる。

近世になると御影石の採掘が盛んになり、第 16・40 次調査では石を切り出した採石遺構が確認されている。住吉川流域は、御影石の産地として知られており、往時の姿を忍ばせる。

第2節 住吉宮町遺跡の地理的環境と歴史的環境

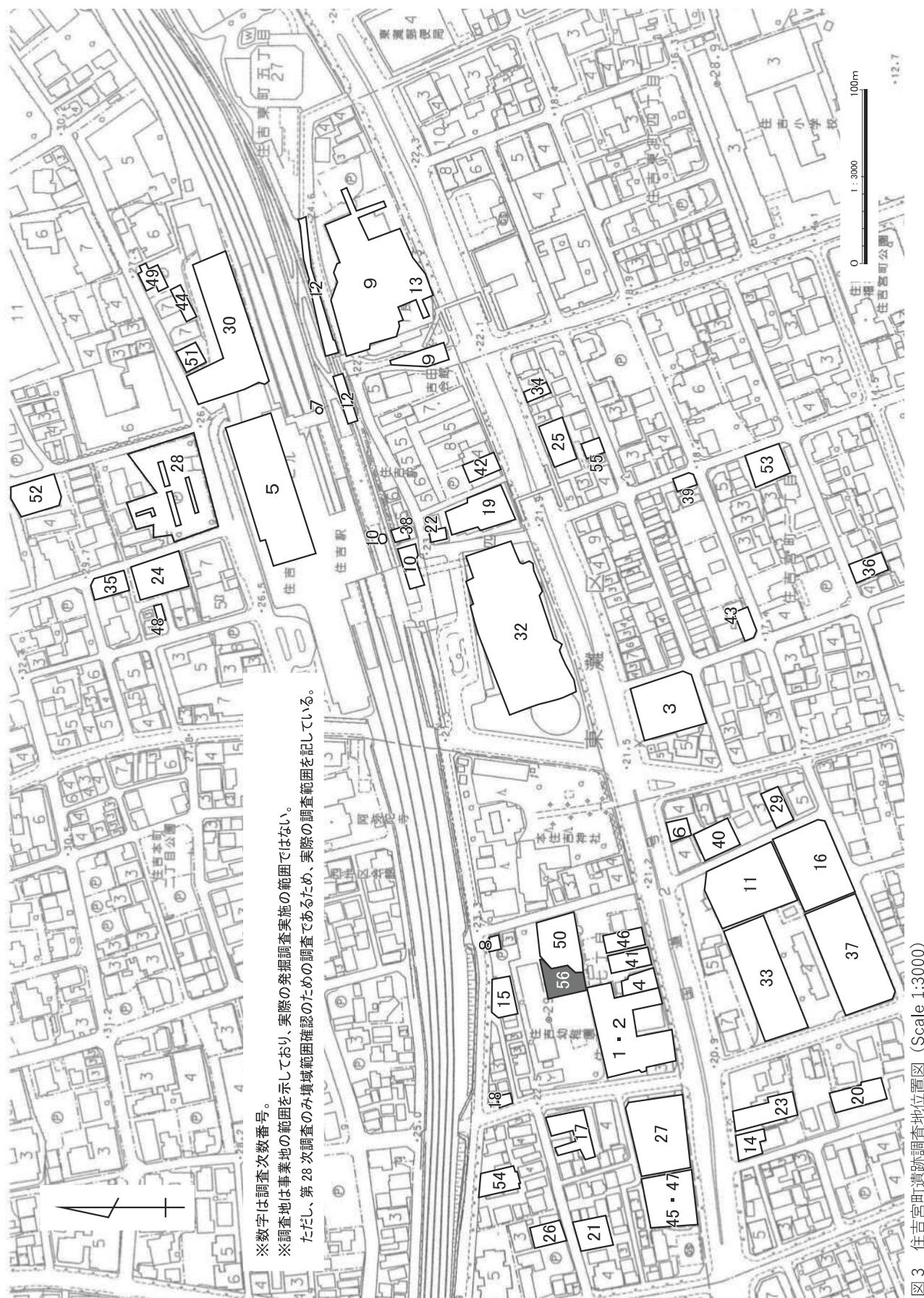


表1 住吉宮町遺跡既往調査一覧表

次数	調査年度	調査地	調査機関	調査面積m ²	主な調査内容	文献
1	85 S60	住吉宮町7	神戸市教育委員会	500	古墳時代後期方墳3基、古墳時代後期末溝・土坑、鎌倉時代土坑	1
2	85 S60	住吉宮町7	神戸市教育委員会	250	古墳時代後期方墳8基	2
3	85 S60	住吉宮町3	神戸市教育委員会	440	古墳時代・鎌倉時代・近世の溝・土坑・ピット	3
4	86 S61	住吉宮町7	神戸市教育委員会	175	古墳時代後期箱式石棺3基、奈良時代溝	4
5	86 S61	住吉本町1	兵庫県教育委員会	4,300	弥生末方形周溝墓3基、方墳10基、円墳1基、箱式石棺2基、石蓋土坑1基、木棺墓1基、土器棺墓1基、土坑墓1基、古墳時代後期以降と弥生時代後期以前の水田跡、鎌倉時代以降の地震痕跡	5
6	87 S62	住吉宮町6	兵庫県教育委員会	90	中世土坑	
7	87 S62	住吉本町1	兵庫県教育委員会	90	弥生末周溝墓2基、方墳1基、土器棺墓1基	6
8	87 S62	住吉宮町7	神戸市教育委員会	30	中世柱穴	7
9	88 S63	住吉東町5他	神戸市教育委員会	3,200	弥生末周溝墓、方墳6基、帆立貝形古墳1基（住吉東古墳） 竪穴建物17棟、奈良時代掘立柱建物9棟	8
10	88 S63	住吉本町1	兵庫県教育委員会	125	弥生後期土坑、方墳3基	6・9
11	88 S63	住吉宮町6	神戸市教育委員会	1,300	弥生中期竪穴建物2棟、弥生末竪穴建物5棟、9・11世紀の掘立柱建物5棟、地鎮遺構	10
12	88 S63	住吉本町1他	兵庫県教育委員会	385	方墳2基、中世溝、石垣状遺構	9
13	89 H元	住吉東町5	スポーツ教育公社	165	古墳時代竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、方墳2基、奈良時代掘立柱建物2棟	11
14	90 H2	住吉宮町6	神戸市教育委員会	500	古墳時代竪穴住居2棟、奈良時代掘立柱建物2棟、井戸3基	12
15	92 H4	住吉宮町7	神戸市教育委員会	50	中世遺物包含層、土石流	13
16	93 H5	住吉宮町6	神戸市教育委員会	275	古墳時代流路、平安時代掘立柱建物2棟、近世採石址	14
17	95 H7	住吉宮町7	神戸市教育委員会	400	古墳時代中期方墳8基（箱式石棺1基）、竪穴建物16棟、掘立柱建物7棟	15
18	95 H7	住吉宮町7	神戸市教育委員会	16	横穴石室（古墳1基）	15
19	95 H7	住吉宮町4	神戸市教育委員会	500	弥生後期土器溜、方墳3基、箱式石棺1基、平安時代掘立柱建物1棟	16
20	96 H8	住吉宮町6	神戸市教育委員会	280	古墳・飛鳥・奈良時代河道・石組遺構	16
21	96 H8	住吉宮町7	神戸市教育委員会	200	古墳後期竪穴住居1棟、古墳未竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟・奈良掘立柱建物1棟	17
22	96 H8	住吉宮町4	神戸市教育委員会	100	古墳時代末溝、落ち込み、奈良時代ピット	17
23	96 H8	住吉宮町6	神戸市教育委員会	350	奈良時代井戸、墨書き土器	18
24	96 H8	住吉本町1	神戸市教育委員会	450	弥生末土器棺、方墳4基（箱式石棺1基）	19
25	97 H9	住吉宮町3	神戸市教育委員会	500	弥生末竪穴建物1棟、古墳掘立柱建物2棟、中世墓	20
26	97 H9	住吉宮町7	神戸市教育委員会	100	古墳竪穴建物1棟、奈良掘立柱建物1棟	21
27	97 H9	住吉宮町7	神戸市教育委員会	900	弥生竪穴建物1棟、古墳時代土坑墓1基、溝	22
28	97 H9	住吉本町1	神戸市教育委員会	360	葺石、周溝（坊ヶ塚古墳）	23
29	97 H9	住吉宮町6	神戸市教育委員会	120	中世溝、土坑	24
30	97 H9	住吉本町1	神戸市教育委員会	765	弥生中期溝、弥生末溝、方墳6基（箱式石棺1基）、竪穴建物1棟・古代～中世掘立柱建物2棟	25
31	97 H9	住吉本町1	神戸市教育委員会	300	中世掘立柱建物1棟、石組遺構	26
32	98 H10	住吉宮町4	神戸市教育委員会	3,260	弥生後期竪穴建物6棟など、古墳時代後期方墳9基、円墳1基、箱式石棺9基	27
33	98 H10	住吉宮町6	兵庫県教育委員会	1,300	弥生末古墳初頭竪穴建物9棟、奈良平安掘立柱建物2棟	28
34	98 H10	住吉宮町3	神戸市教育委員会	40	弥生後期土坑、古墳後期柱列、奈良旧河道	29
35	01 H13	住吉本町1	神戸市教育委員会	170	方墳1基、葺石、埴輪列	30
36	01 H13	住吉宮町3	神戸市教育委員会	150	古墳時代後期竪穴建物1棟	31
37	02 H14	住吉宮町6	神戸市教育委員会	900	弥生末土坑、古墳後期溝、平安掘立柱建物1棟、溝、土坑	32
38	03 H15	住吉宮町4	神戸市教育委員会	80	方墳の葺石列（第10次調査3基の内1基）	33
39	04 H16	住吉宮町3	神戸市教育委員会	20	古墳時代後期竪穴建物1棟、掘立柱建物2棟	34
40	05 H17	住吉宮町6	神戸市教育委員会	200	古墳後期竪穴建物1棟、平安掘立柱建物1棟、近世採石址	35
41	05 H17	住吉宮町7	神戸市教育委員会	15	弥生末土坑	36
42	06 H18	住吉宮町4	神戸市教育委員会	180	方墳1基、掘立柱建物1棟	37
43	06 H18	住吉宮町3	神戸市教育委員会	60	弥生末溝、古墳後期竪穴建物1棟	37
44	06 H18	住吉本町1	神戸市教育委員会	70	方墳2基、埋甕1基、落ち込み1基	37
45	08 H20	住吉宮町7	神戸市教育委員会	427	古墳時代中期水田状遺構、古墳後期竪穴建物9棟・掘立柱建物3棟	38
46	08 H20	住吉宮町7	神戸市教育委員会	220	方墳1基、弥生時代土坑	39
47	10 H22	住吉宮町7	神戸市教育委員会	130	古墳後期～奈良時代の竪穴建物4棟・掘建柱建物1棟・土坑・落ち込み、古墳時代中期水田状遺構	40
48	10 H22	住吉本町1	神戸市教育委員会	98	方墳1基（葺石・周溝）、土坑状の落ち込み、ピット	40
49	10 H22	住吉本町1	神戸市教育委員会	300	古墳後期竪穴建物2棟、祭祀遺構	40
50	11 H23	住吉宮町7	神戸市教育委員会	483	方墳1基、古墳後期掘立柱建物2棟	41
51	13 H25	住吉本町1	神戸市教育委員会	60	縄文時代晚期の土器、慶長伏見地震痕跡	42
52	16 H28	住吉本町1	神戸市教育委員会	140	5世紀初頭の方墳1基（葺石・埴輪・主体部）	43
53	17 H29	住吉宮町3	神戸市教育委員会	140	古墳時代中期竪穴建物13棟・掘立柱建物1棟、ピット、土坑、溝	44
54	17 H29	住吉宮町7	神戸市教育委員会	80	古墳時代中期方墳（葺石）、奈良時代前半落ち込み1基	44
55	18 H30	住吉宮町3	神戸市教育委員会	27	古墳時代中期～後期ピット、落ち込み	45
56	20 R2	住吉宮町7	神戸市文化スポーツ局	310	中世の鋤溝・溝、飛鳥時代の竪穴建物1棟・掘立柱建物1棟、古墳時代中期古墳2基（葺石・周溝）、箱式石棺1基、弥生時代後期竪穴建物1棟	本書

第2節 住吉宮町遺跡の地理的環境と歴史的環境

既往調査参考文献一覧

次数	文献
1次	1 西岡誠司・山本雅和 1988 「住吉宮町遺跡－第1次調査－」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
2次	2 山本雅和 1988 「住吉宮町遺跡－第2次調査－」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
3次	3 口野博史 1988 「住吉宮町遺跡－第3次調査－」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
4次	4 山本雅和 1989 「住吉宮町遺跡－第4次－」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
5次	5 渡辺昇・高瀬一嘉 1990 「坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群II）」『兵庫県教育委員会
7・10次	6 渡辺昇 1989 「住吉宮町遺跡群I（坊ヶ塚遺跡）」『兵庫県教育委員会
8(旧5)次	7 西岡誠司 1990 「住吉宮町遺跡第5次（発掘調査一覧表）」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
9次	8 丹治康明・東喜代秀・須藤宏・橋詰清孝 1994 「住吉宮町遺跡第9次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
10・12次	9 西口圭介・久保弘幸 1991 「住吉宮町遺跡発掘調査報告書－住吉南線一部新設工事及び住吉駅ビル建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」『兵庫県教育委員会
11次	10 丸山潔・須藤宏・松林宏典 1990 「住吉宮町遺跡第11次発掘調査」『神戸市教育委員会
13次	11 橋詰清孝「住吉宮町遺跡」1992『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
14次	12 丹治康明・山本雅和・谷正俊・池田毅・橋詰清孝 1993 「住吉宮町遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
15次	13 内藤俊哉 1995 「住吉宮町遺跡第15次調査（発掘調査一覧表）」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
16次	14 谷正俊 1996 「住吉宮町遺跡第16次調査（発掘調査一覧表）」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
17・18次	15 小野田義和・秦憲二 1998 「住吉宮町遺跡（第17次・第18次調査）－阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査－」『神戸市教育委員会
19・20次	16 小野田義和・日目謙一・岸岡貴英・大西貴夫 2001 「住吉宮町遺跡（第19次・第20次調査）－阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査－」『神戸市教育委員会
21・22次	17 川上厚志 1999 「住吉宮町遺跡第21次調査」・「住吉宮町遺跡第22次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
23次	18 菊地逸夫・神野信 1999 「住吉宮町遺跡第23次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
24次	19 安田滋・菅本宏明・千種浩・中村大介・平田朋子 2001 「住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書」『神戸市教育委員会
25次	20 内藤俊哉 2000 「住吉宮町遺跡第25次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
26次	21 浅谷誠吾 2000 「住吉宮町遺跡第26次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
27次	22 西岡誠司・閔野豊 2000 「住吉宮町遺跡第27次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
28次	23 菅本宏明 2000 「坊ヶ塚古墳試掘調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
29(旧28)次	24 阿部敬生 2000 「住吉宮町遺跡第28次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
30(旧29)次	25 菅本宏明・平田朋子 2000 「住吉宮町遺跡第29次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
31(旧30)次	26 内藤俊哉 2000 「住吉宮町遺跡第30次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
32次	27 安田滋・菅本宏明・千種浩・中村大介・平田朋子 2001 「住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書」『神戸市教育委員会
33次	28 服部寛・寒川旭 2002 「住吉宮町遺跡第33次調査」『兵庫県教育委員会
34(旧33)次	29 閔野豊 2001 「住吉宮町遺跡第33次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
35次	30 阿部敬生 2004 「住吉宮町遺跡第35次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
36次	31 東喜代秀・阿部功 2004 「住吉宮町遺跡第36次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
37次	32 井尻格・中村大介 2003 「住吉宮町遺跡第37次発掘調査報告書」『神戸市教育委員会
38次	33 中居さやか 2006 「住吉宮町遺跡第38次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
39次	34 浅谷誠吾 2007 「住吉宮町遺跡第39次調査」『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
40次	35 中谷正 2008 「住吉宮町遺跡第40次調査」『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
41次	36 中居さやか 2008 「住吉宮町遺跡第41次調査（調査一覧表）」『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
42・43・44次	37 富山直人・須藤宏・中谷正 2009 「住吉宮町遺跡第42・43・44次調査」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
45次	38 口野博史 2010 「住吉宮町遺跡第45次調査発掘調査報告書」『神戸市教育委員会
46次	39 口野博史 2009 「住吉宮町遺跡第46次調査発掘調査報告書」『神戸市教育委員会
47・48・49次	40 口野博史・阿部敬生・須藤宏 2013 「住吉宮町遺跡第47・48・49次調査」『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
50次	41 口野博史 2014 「住吉宮町遺跡第50次調査発掘調査報告書」『神戸市教育委員会
51次	42 内藤俊哉 2016 「住吉宮町遺跡第51次調査」『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
52次	43 石島三和 2019 「住吉宮町遺跡第52次調査」『平成28年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
53次	44 荒田敬介 2020 「住吉宮町遺跡第53次調査」『平成29年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
54次	45 藤井太郎 2020 「住吉宮町遺跡第54次調査」『平成29年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
55次	46 池田毅 2022 「住吉宮町遺跡第55次調査」『平成30年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
56次	本書

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代中期、飛鳥時代、平安時代の合計4面の遺構面とそれに伴う遺構、遺物を確認した。主要な遺構は、中世の鋤溝・溝、飛鳥時代の竪穴建物1棟(SB201)・掘立柱建物1棟(SB202)、古墳時代中期と推測される古墳2基(SZ301・SZ302)・箱式石棺1基(ST301)、弥生時代後期の竪穴建物1棟(SB401)である。

第2節 基本層序

地表より約1.4mまでの深さに盛土、旧耕土、床土、にぶい赤褐色細砂質土(近世洪水層)が堆積している。その下層に約0.4mの厚さで中世から近世の遺物を含むにぶい赤褐色細～中砂質土(中世～近世洪水層)および第1遺物包含層である暗赤褐色中～粗砂質土層、約0.2mの厚さをもつ第2遺物包含層である赤褐色粗砂質土層(第1遺構面基盤層)が続く。さらに下層に約0.1mの厚さをもつ第3遺物包含層である黒褐色中砂質土層(第2遺構面基盤層)、第4遺物包含層である厚さ約0.3mの褐灰色シルト質土層(第3遺構面基盤層)が続く。第4遺構面は、南側では黄褐色粘質土層上面で検出された。

また、各遺構面の標高は、第1遺構面で標高約20.9～21.2m、第2遺構面で約20.9m、第3遺構面で約20.8m、第4遺構面で約20.5mである。



写真3 調査区周辺写真

第3節 第1遺構面 平安時代

第3節 第1遺構面 平安時代

中世～近世の遺物を含んだ暗赤褐色中～粗砂質土を掘削後、赤褐色粗砂質土層を基盤層として上面で検出された遺構面である。溝18条、土坑1基、ピット14基を検出した。遺構面上および遺構より、平安時代の土器が出土している。

1. 第1遺構面の遺構と遺物

1) 溝

調査区の全域にわたり、北東一南西方向に延びる溝17条、北西一南東方向に延びる溝1条の合計18条を検出した。このうち、調査区南側のSD101、SD103ならび中央部のSD107

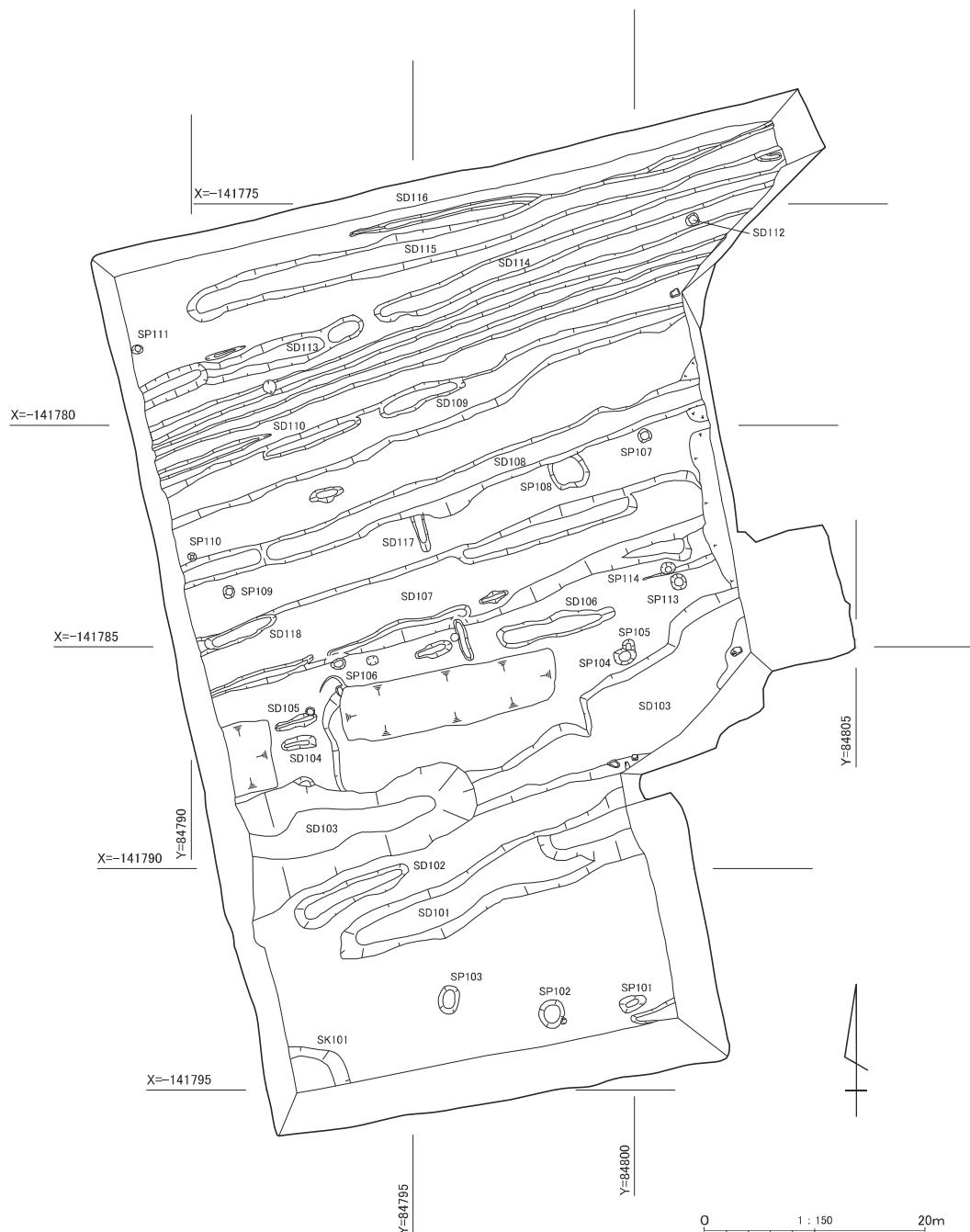


図4 第1遺構面平面図 (Scale 1:150)

は掘削の幅および深度がSD108～SD116に比して深く、流路状の堆積が確認されたことから用排水の溝と考えられる。また、北側のSD108～SD116は掘削方向が一定で、掘削深さもほぼそろっていることから耕作溝と考えられる。以下に主な遺構のみを記載する。

SD101

調査区の南側で検出した北東一南西方向に延びる溝である。最大幅1.6m、長さ7.1m、深さ0.35mを測る。

SD103

調査区の南側で検出した北東一南西方向に延びる溝である。西半分をより深く掘削している。最大幅2.6m、長さ12.5以上m、深さは西側で0.75m・東側で0.35mを図る。SD103からは古墳時代後期の須恵器が出土しているが、周辺から流れ込んだものと考えられる。

SD107

調査区の中央で検出した北東一南西方向に延びる溝である。幅0.9m、長さ12.3m以上、深さ0.15mを測る。

2) 土坑

SK101

調査区の南西端で検出した土坑である。本遺構の一部は調査区外に広がるもの、平面形状は円形と推測され、検出半径約1.2m、深さ0.16mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。

3) ピット

ピットは全部で14基検出された。掘建建物の柱としてはまとまらず、それぞれ単独で掘削されたものと推測される。

SP110

調査区中央部で検出したピットである。平面形状は円形を呈し、直径26cm、深さ6cmを測る。埋土からは土師器高台付塊（1）と土師器皿（2, 3）が出土している。

1はSP110から出土した土師器高台付塊である。高台は削り出して作り、体部はゆるく内湾して立ち上がり口縁端部は外側に屈曲する。2と3はSP110から出土した土師器皿である。2は体部が内湾して立ち上がるものの、体部中ほどで外湾し口縁端部は外側に屈曲する。3は厚い体部をもち、ゆるく内湾して立ち上がり口縁部はそのままおさめる。

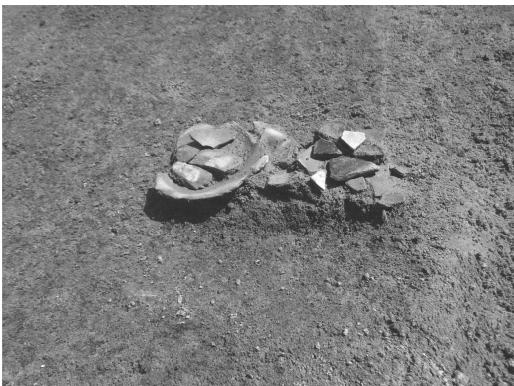


写真4 SP110出土状況

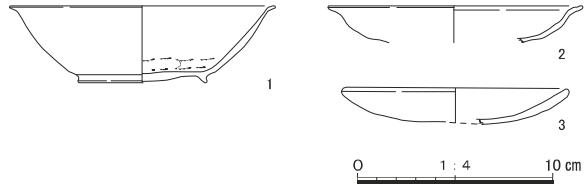


図5 SP110出土遺物実測図 (Scale 1:4)

第4節 第2遺構面 飛鳥時代

第4節 第2遺構面 飛鳥時代

本来は黒褐色中砂質土層を基盤層としてその上面より遺構が切り込まれている遺構面であるが土壤化が著しく、この面では遺構の確認が困難であったため、遺構が検出できたのは、北側では第3遺構面である厚さ約30cmの褐灰色シルト質土層上面（第4遺物包含層上面）、南側では後述する1号墳周溝埋土である黄褐色粒砂土上面だった。竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、溝2条、性格不明遺構1基、ピット18基を検出した。遺構面上および遺構内から出土した遺物から飛鳥時代の遺構面と考えられる。

1. 第2遺物包含層の遺物

4～7は第2遺物包含層である赤褐色粗砂質土中から出土した。4は土師器釜である。体部

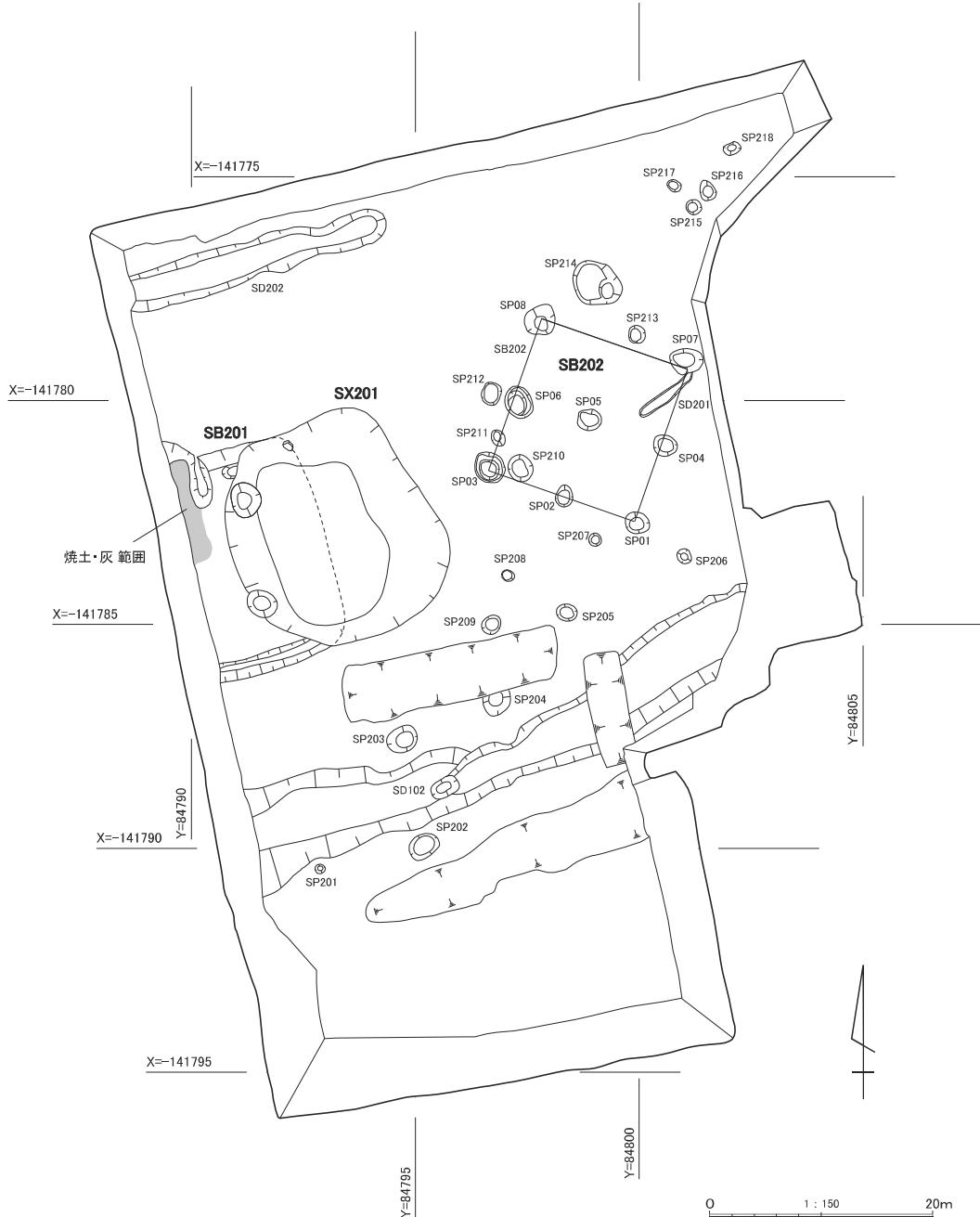


図6 第2遺構面平面図 (Scale 1:150)

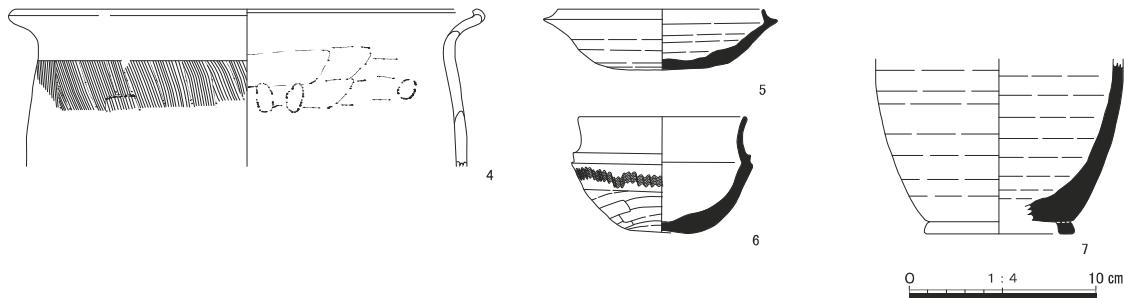


図7 第2遺物包含層および遺構面出土遺物実測図 (Scale 1:4)

はまっすぐに立ち上がり頸部で外側へ大きく屈曲し、口縁端部は内側に折り曲げる。5は須恵器坏身である。平らな底部をもち、口縁部の立ち上がりは短い。6は須恵器塊である。体部と口縁部との境を強くナデて2条の稜を形成し、突帯下に8条の櫛描波状文を施す。口縁部は内塊して立ち上がり、端部付近で外反する。7は須恵器壺類である。高台は張り付けている。

2. 第2遺構面の遺構と遺物

1) 壘穴建物

SB201

調査区中央部西側で検出した平面形状が隅丸方形と考えられる壘穴建物である。本遺構の西半は調査区外に拡がる。また、東辺部分は後述の落ち込み(SX201)によって切られているため、検出できたのは遺構の東半部、南北幅(全長)約5.0m、東西辺約1.0mほどである。検出面からの深さは約0.2mである。

建物内は南辺および北辺の壁際に周溝があり、主柱穴と考えられる直径約0.6m、深さ約0.2m、柱間約2.4mを測るピットを北東部と南東部で1基ずつ、合計2基検出した。また、北壁中央部に壁を切り込む状態でカマドが造り付けられていた。カマドは東半部を検出したが、西半部は調査区外に続いている。平面形状は逆U字形状と推定され、検出長は東西幅約0.8m、南北幅約1.6mである。カマド前面には灰混じりの焼土が認められた。カマドの北側の建物外部に煙道の痕跡を確認した。カマド前面で土師器坏・甕、須恵器坏などの破片がまとまって出土しており、飛鳥II～III様式に属すると考えられる。

8と9は土師器塊である。8は体部が内湾して丸みもち、口縁端部は短く外反する。9は小片から復元を行った。口縁部は厚く口縁端部は面とする。内部にミガキを施す。周辺から放射状にミガキを施す土師器塊の体部片が出土しており、接合関係は確認されたものの、これらは同一個体と考えられる。

10と11は土師器小型甕である。10に比して11は頸部の稜が不明瞭である。いずれも摩耗が激しい。12と13は土師器甕である。いずれも小片から口縁部径を復元している。12は頸部から屈曲し口縁端部は外側へつまみ出す。22は頸部で屈曲し口縁部までいたる。14は須恵器坏身である。全体的に厚みがある。受部上端が口縁端部よりやや低く位置する。

2) 掘立柱建物

SB202

調査区北東側で検出した2間×2間の掘立柱建物である。柱穴8基で構成されており、柱穴は径約0.5m～0.7m、検出面からの深さ約0.1～0.4mを測る。平面形は円形、掘方は東辺中央部のみ浅い。総柱建物と考えられるが北辺中央部の柱穴を欠く。柱間は約1.8mを測る。ピット内から土師器と須恵器の小片が出土した。

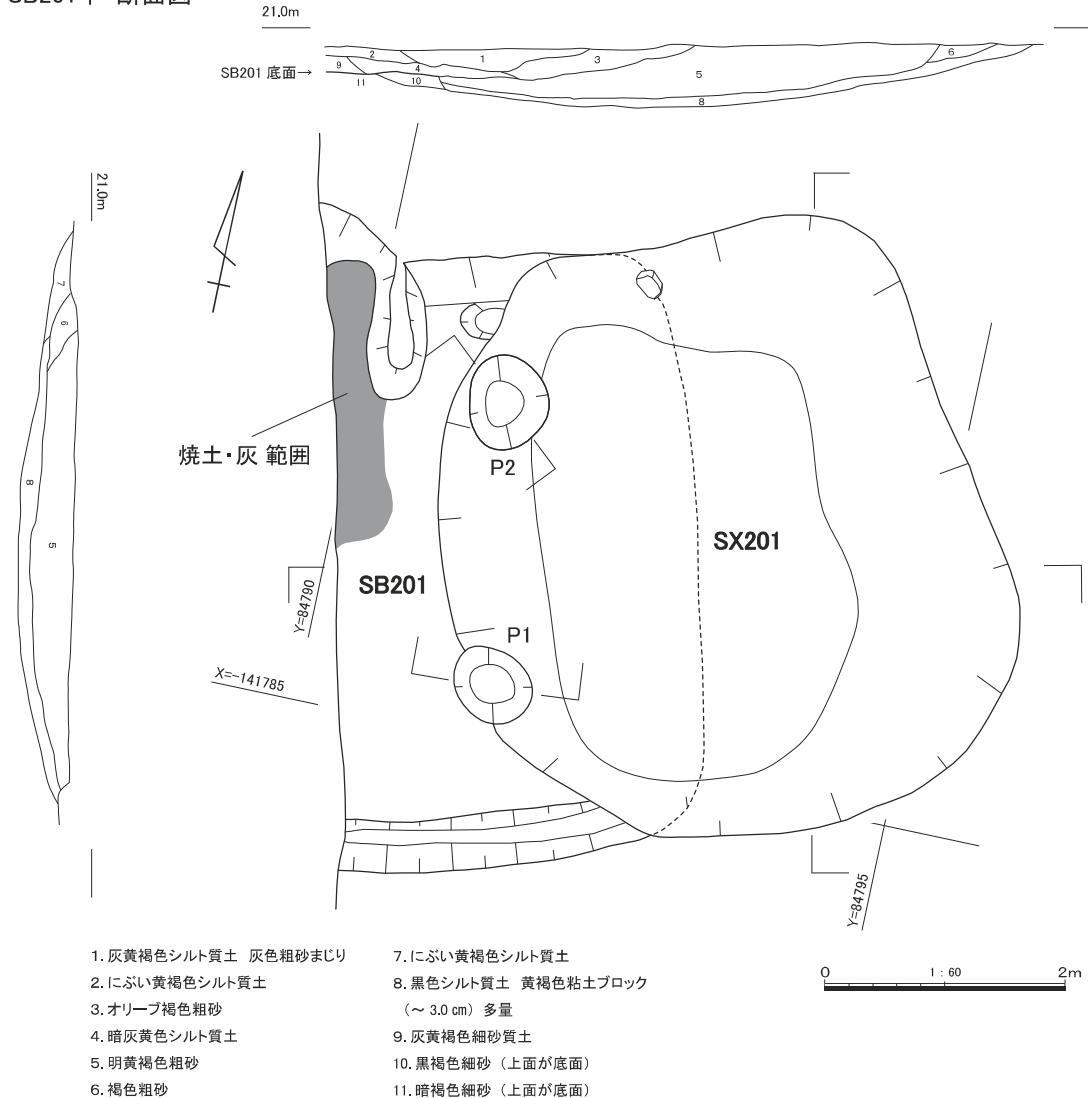
第4節 第2遺構面 飛鳥時代

3) 落ち込み状遺構

SX201

SB201の東側で検出した落ち込みである。平面形状が隅丸方形を呈し、長径5.0m、短径4.5m、深さ約0.5mを測る。SB201を切っていることからSB201より新しい遺構といえるが、出土した遺物がないため詳細な時期は不明である。

SB201平・断面図



SB201-P1・P2断面図

SB201カマド周辺遺物出土状況

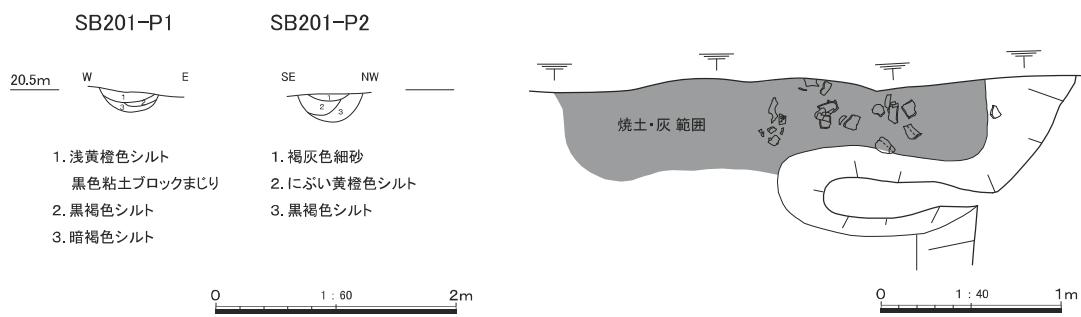


図8 SB201 平・断面図および遺構図

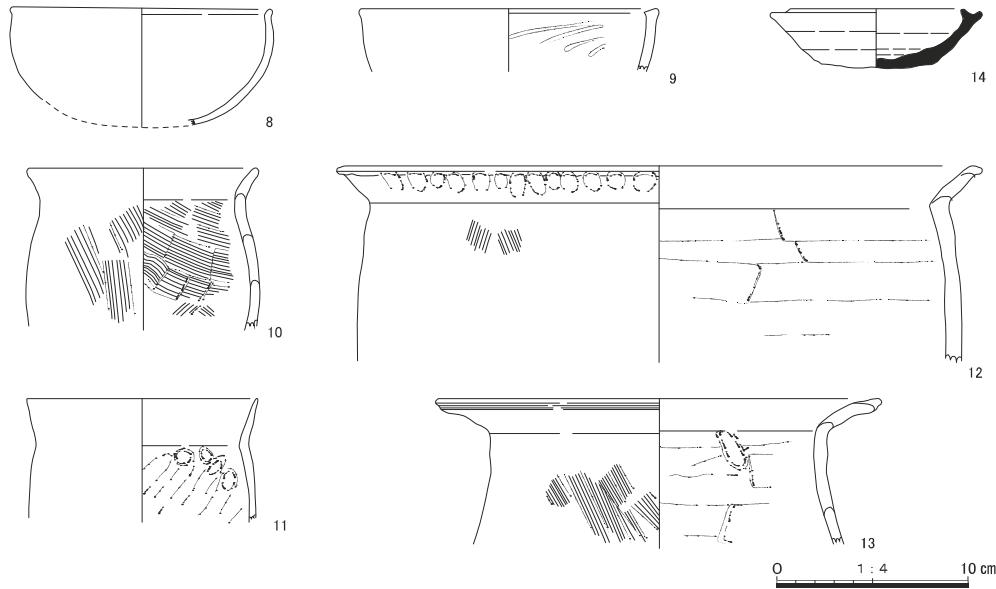


図9 SB201出土遺物実測図 (Scale 1:4)

SD201

調査区北東側で検出した、SB202-SP07 に切られる溝である。断面形状は浅いU字形を呈し、検出長約 1.4 m、幅約 0.2m、検出面からの深さ 0.1m を測る。

SD202

調査区北西側で検出した溝である。断面形状は南側だけ 1段下がる浅いU字形を呈し、検出長約 5.7 m、幅約 1 m、検出面からの深さ約 0.25m を測る。

SP201～218

調査区の南側から北東で検出したピットである。平面形状が円形、断面形状がU字状を呈し、直径約 0.2～1.2 m、深さ約 0.1m～0.35m を測る。建物としてはまとまらない。

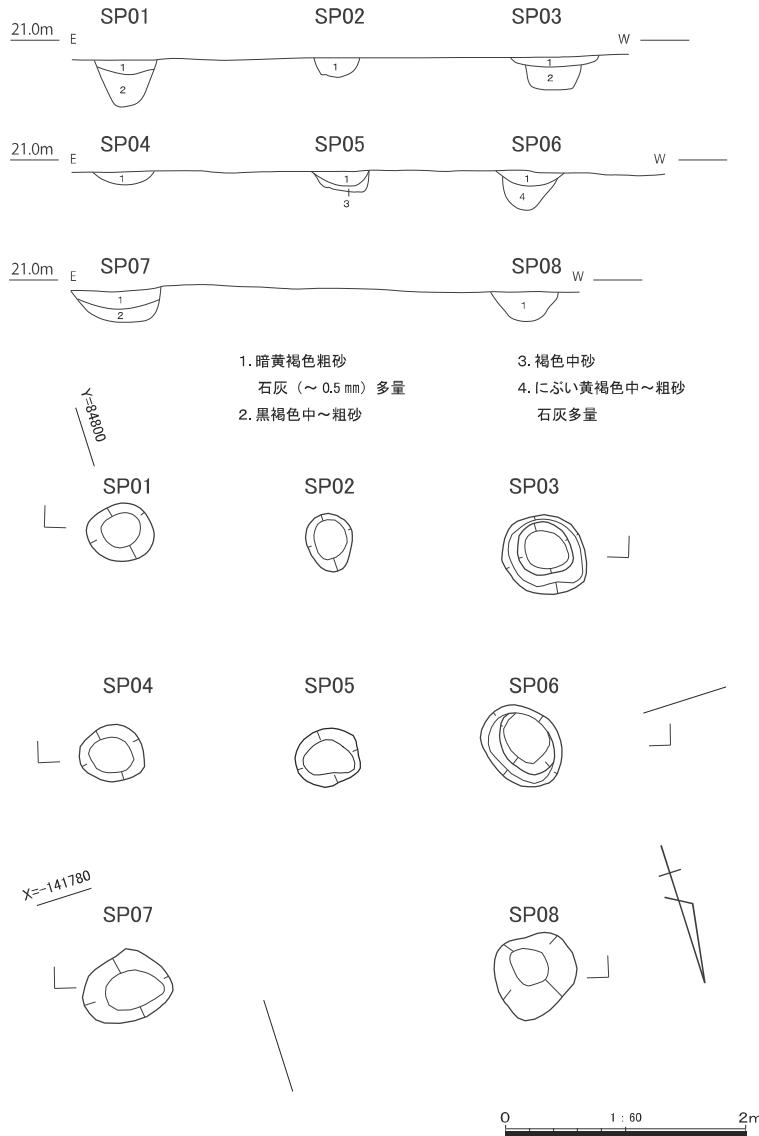


図10 SB202平・断面図 (Scale 1:60)

第5節 第3遺構面 古墳時代

第5節 第3遺構面 古墳時代中期

飛鳥時代～古墳時代の遺物を含んだ黒褐色中砂質土を掘削後、褐灰色シルト質土上面で検出した遺構面である。古墳2基、箱式石棺1基、土坑1基、ピット7基を検出した。遺構面上および遺構内から出土した遺物から、古墳時代中期の遺構面と考えられる。

1. 第3遺構面の遺構と遺物

1) 古墳

1号墳 (SZ301)

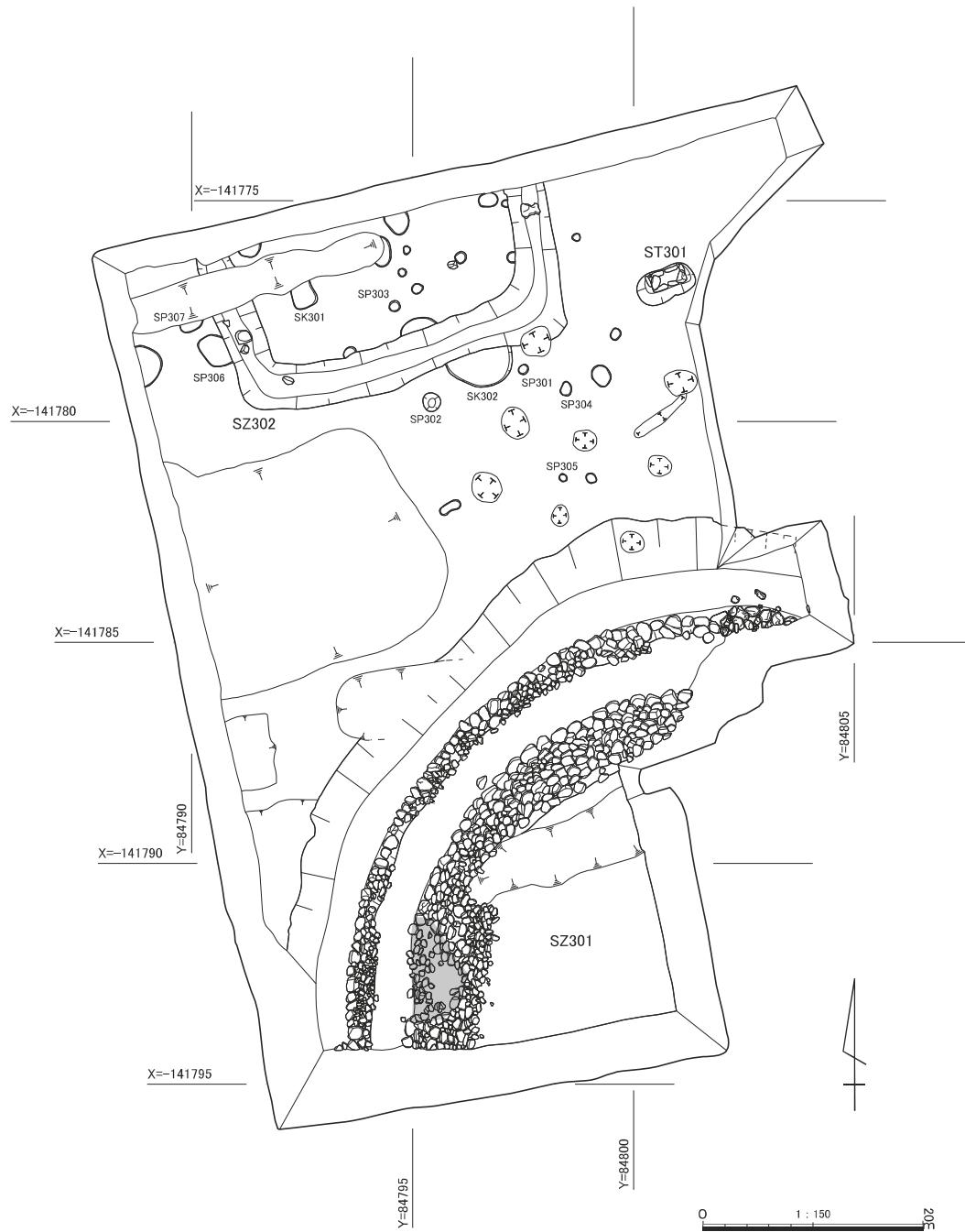


図11 第3遺構面平面図 (Scale 1:150)

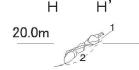


墳丘上段断ち割り断面図



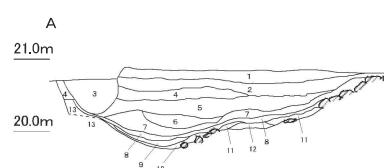
1. 暗灰色シルト砂(苔石裏込土)
2. 褐灰色砂質土(弥生時代遺物包含層)
3. 灰褐色土(流土)
4. 黄褐色シルト砂
5. 褐黄色砂質土

墳丘下段断ち割り断面図



1. 暗灰色シルト砂(苔石裏込土)
2. 褐黄色砂質土

墳丘上段断ち割り断面図



1. にぶい黄褐色粒砂質土(マンガン多量)
2. にぶい橙色粒砂質土
3. 暗褐色中砂質土 炭化物混じり(造構埋土)
4. にぶい褐色極細砂質土
5. にぶい黄褐色極細砂質土
6. 橙色中砂質土 極細砂質土混じり
7. にぶい黄褐色中砂質土 極細砂質土混じり
8. にぶい黄褐色シルト質土
9. 褐色シルト質土
10. 黒褐色粘性シルト質土
11. 灰黄褐色粘性細砂質土
12. にぶい黄褐色粗砂質土
13. 黑褐色中～粗砂質土 褐灰～にぶい黄褐色極細砂混じり(造構面ベース層)

0 1 : 100 5m

図 12 1号墳(SZ301) 平面および見通し図 (Scale 1:100)

第5節 第3遺構面 古墳時代

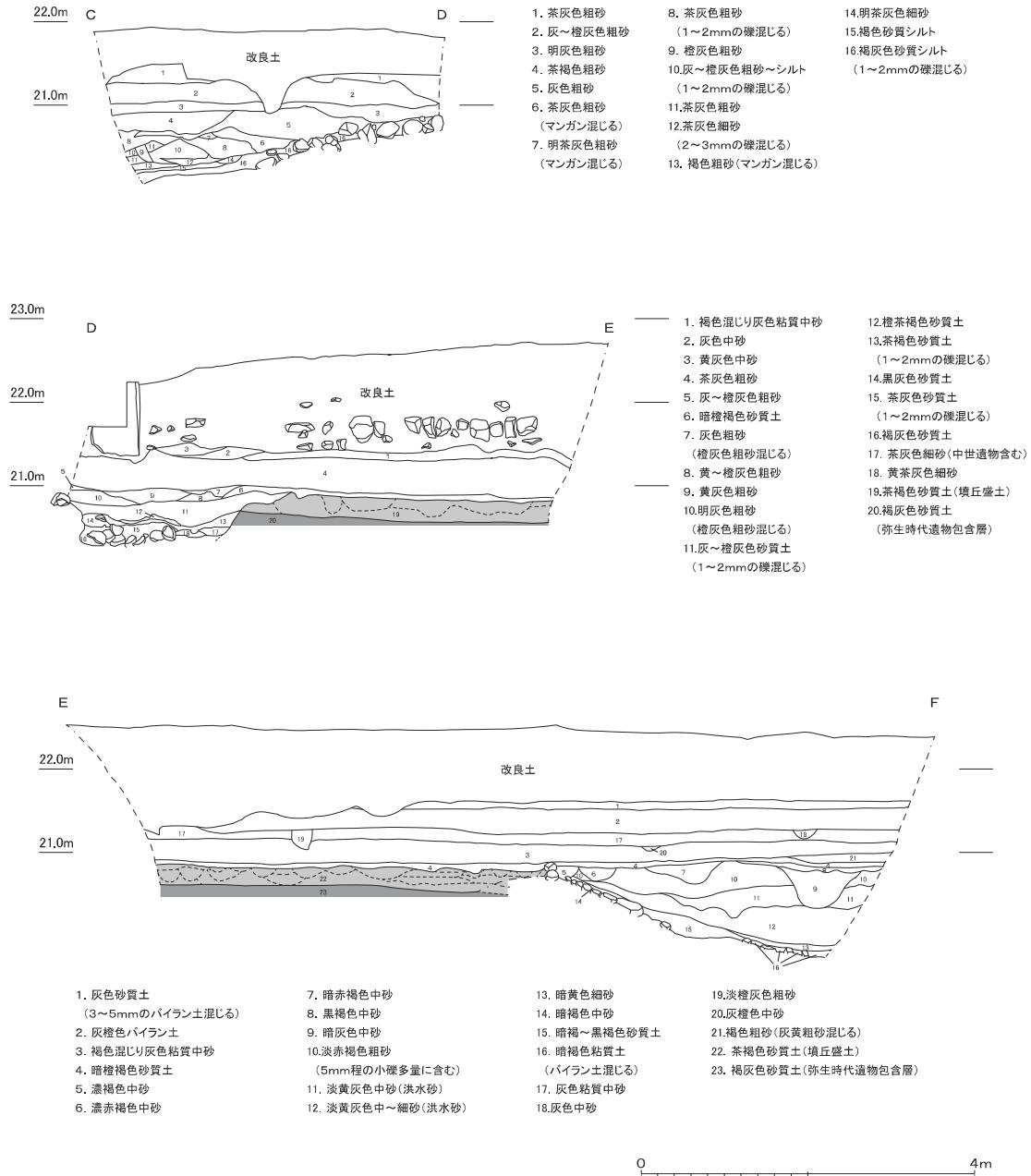


図13 壁断面図 (Scale 1:100)

墳丘

調査区の南側で検出した古墳である。今回確認できたのは北西側の3分の1ほどであり全容が明らかではないが、古墳の形は円墳または前方後円墳を南側に向ける前方後円墳または帆立貝形古墳の可能性も考えられる。墳頂部は耕土層で削平されている。墳丘は2段築成で、斜面全面に葺石が施される。

墳丘墳裾からの検出した範囲での長さは約9.0m、復元した墳丘の直径は約18m、墳頂部の標高はT.P.20.7m～20.9mを測り、南東へ行くほど低くなる。墳頂平坦面は現存で南北約5.5m、東西約4.5m、周溝底から残存する墳頂平坦面までの高さは0.9mを測る。墳丘の大部分を削り出し、盛土が確認できたのは墳頂部から約0.2m程度である。墳頂部上で埋葬施設は確認できなかった。

テラス

テラスは幅約 0.8 m、周溝底からの高さ 0.3 m を測り、標高は北側で約 T.P.20.1 m、南側で T.P.19.9 m であり、南に向かってやや低くなる。北側で鉄製の U 字形鋤先が出土した。埴輪の樹立痕跡は確認できなかった。

葺石

葺石は墳丘の傾斜面全面に葺かれている。おおよそ 2.5 m 間隔で縦方向に目地が通っており、葺石施工の基準と考えられる。1段目は周溝底、2段目はテラスの基盤層を掘り込んで基底石を据えるが、1段目は葺石を立てて設置しながら弧を描いて並べるのに対し、2段目は石の長手を横向きに設置しながら多角形状に並べる。北側斜面の基底石および葺石はともに大きく、比較的密に葺かれるのに対して、南に向かうほど小さくなる。2段目西側斜面(図 12 の灰色部)は後世の洪水によって崩落したと思われ、下方向にずり下がっている状況が確認された。葺石の大きさは、北側斜面の基底石は約 40cm、それ以外は約 15 ~ 35cm で、西側斜面の基底石は約 30cm、それ以外は約 10 ~ 20cm である。

周溝

墳丘の周囲に幅約 2.0 m の周溝がめぐる。周溝外側肩部から底までの深さは約 1.0 m を測り、検出面の標高は北側で T.P.20.8 m、南側で T.P.20.6 m である。周溝外側肩部よりテラス上面の方が低く、斜面の角度は墳丘側が 25 度に対し、外側は 35 度と急峻に削り出す。

周溝埋土は上層からにぶい赤褐色～橙色粒砂質土、にぶい褐色～にぶい黄褐色極細砂質土、橙色～にぶい黄橙色中砂質土 極細砂質土混、にぶい黄褐色～褐色シルト質土、黒褐色粘性シルトの順であり、層厚約 30cm である上層のにぶい赤褐色～橙色粒砂質土、層厚約 30cm である中層のにぶい褐色～にぶい黄褐色極細砂質土、層厚約 30cm である下層の橙色～にぶい黄橙色中砂質土極細砂質土混は飛鳥時代の洪水によって堆積した洪水層、層厚約 10cm である最下層のにぶい黄褐色～褐色シルト質土、黒褐色粘性シルトは築造直後から流れ込んだ土砂と考えられる。

出土遺物

下層からは古墳時代中期前半の土師器甕が出土したが、土層の堆積状況から流れ込んだものと考えられ、本墳の築造年代を示すものとはいがたい。

周溝内からは古墳時代中期～飛鳥時代の土器、周溝底で刀子などが出土した。しかし、本古墳の築造年代を判断できる遺物は出土しなかった。

15 と 16 は土師器甕である。15 は巻き上げのち外部に痕跡をよく残す。16 は底部から体部

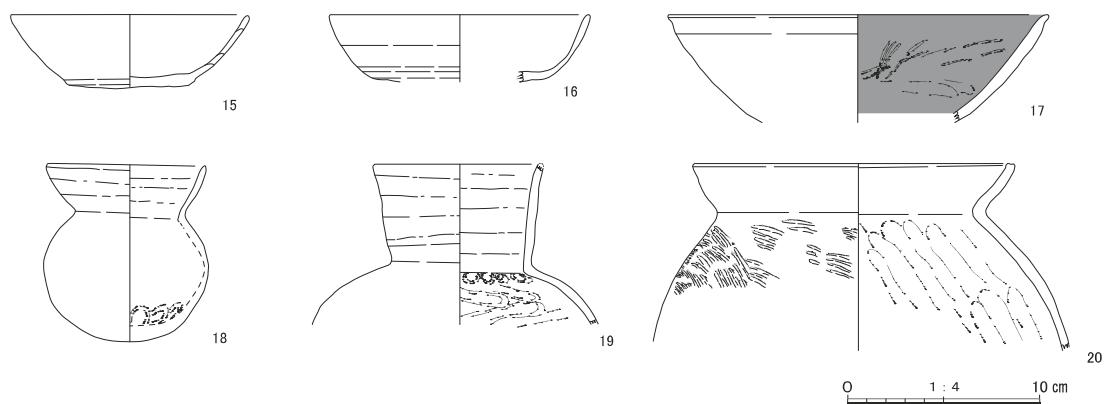


図 14 1号墳 (SZ301) 周溝出土遺物実測図 (1) (Scale 1:4)

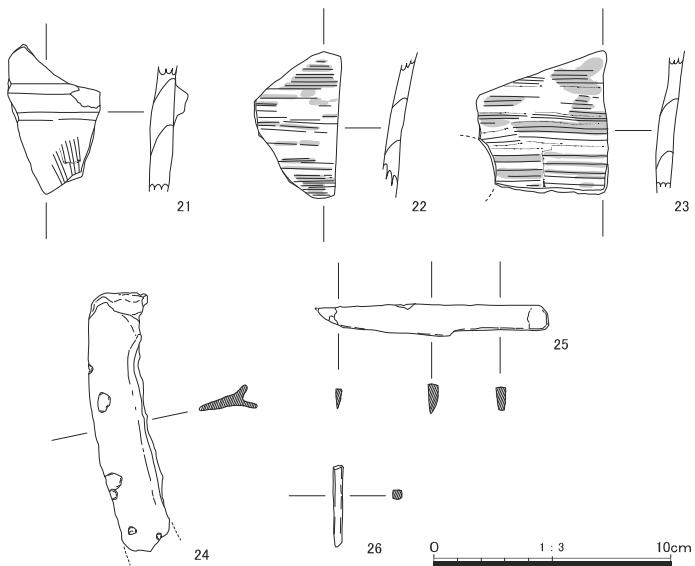


図15 1号墳(SZ301)周溝出土遺物実測図(2)(Scale 1:3)

く完形に復元することができなかった。頸部から内湾して短く立ち上がり、口縁端部に面取りを行う。胴部～底部の破片から長胴形に復元できる。

21～23は円筒埴輪片である。21は断面台形の突帯をもつ。22と23はB種ヨコハケを施し、外面に赤色塗料を塗布する。23は透孔がみえる。21は橙味をもつものに対し、22と23は白味をもつ。1号墳では円筒埴輪の樹立ではなく、小破片のみの出土であるため、周辺からの流れ込みと判断される。

24は鉄製U字形鋤先である。25は鉄製刀子である。26は鉄簇の茎と推測される。

2号墳(SZ302)

北側で検出した周溝を伴う低墳丘の方墳である。北半の大部分が調査区外に出ているため全容は不明である。墳丘は東西方向約6.0m、周溝から墳丘上までの高さ約0.4m、周溝を含んだ全長は約8.0m、周溝幅約1.0mを測る。周溝内および墳丘上から弥生時代後期から庄内式併行期の土器片が出土しているが、周辺からの流れ込みの可能性がある。

27は弥生土器大型高環である。口縁部は外反して立ち上がり口縁端部はナデにより面取りを施す。28は弥生土器甕である。頸部は外側へ強く外反し口縁端部は面取りを施す。

3) 箱式石棺

ST301

1区東側で検出した東西方向に長軸をもつ箱式石棺である。石棺規模は短軸長0.5m、内法0.2m、長軸長0.9m、内法0.7m、深さ0.3m、掘形規模は、短軸長0.7m、長軸長1.3m、深さ0.3mを測る。

北側の側石は長辺約0.3mのもの2枚で構成され、南側は長辺0.3m、0.25mの大きいものの2枚に加え、東側の小口との隙間を埋めるように、東端に拳大の石が1個設置されている。小口は1枚で構成され、西側の小口は、北・南側の側石との間、および小口外側と掘方との間の隙間を埋めるように、1個ずつ計3個拳大の石を設置していた。また、小口の底部は棺底に落ち込んでいた。蓋石は、東側の小口と南東の側石の上に1枚、西側の小口および北西と南西の側石に1枚、計2枚が蓋をした状態で検出された。蓋石と石棺本体、および小口と側石など、

の立ち上がりが急で体部はまっすぐにのびる。調整が明瞭に残る。17は黒色土器の甕である。体部がやや内湾してのび口縁端部外側に凹みをもつ。

18は土師器小壺である。体部は球状で、頸部は内湾して立ち上がる。

19は土師器直口壺である。頸部はまっすぐにやや傾斜して立ち上がる。

20は土師器甕である。周溝内に転がりこんだ状況で出土しており、口縁部から底部片まで確認しているものの、破片の摩耗が激しく

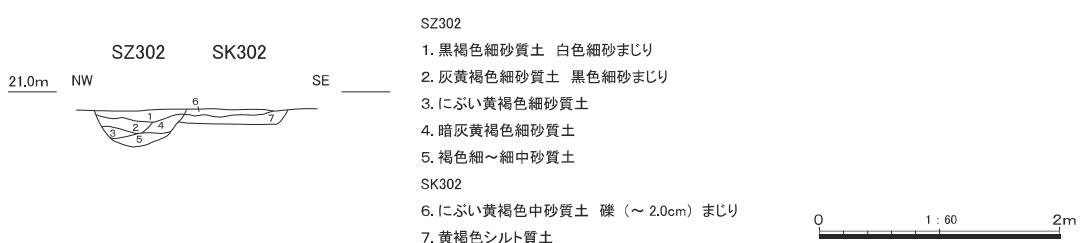
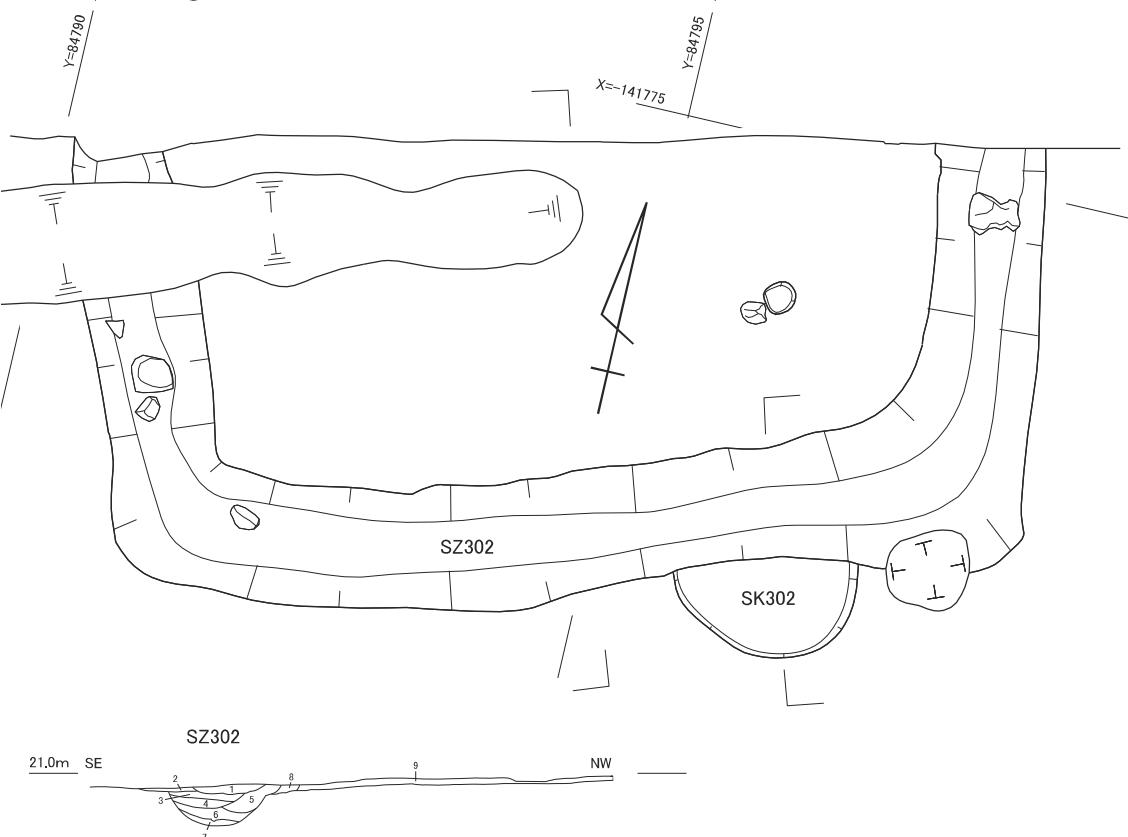


図 16 2号墳 (SZ302) 平面および周溝断面図 (Scale 1:60)



図 17 2号墳 (SZ302) 出土遺物実測図 (Scale 1:4)

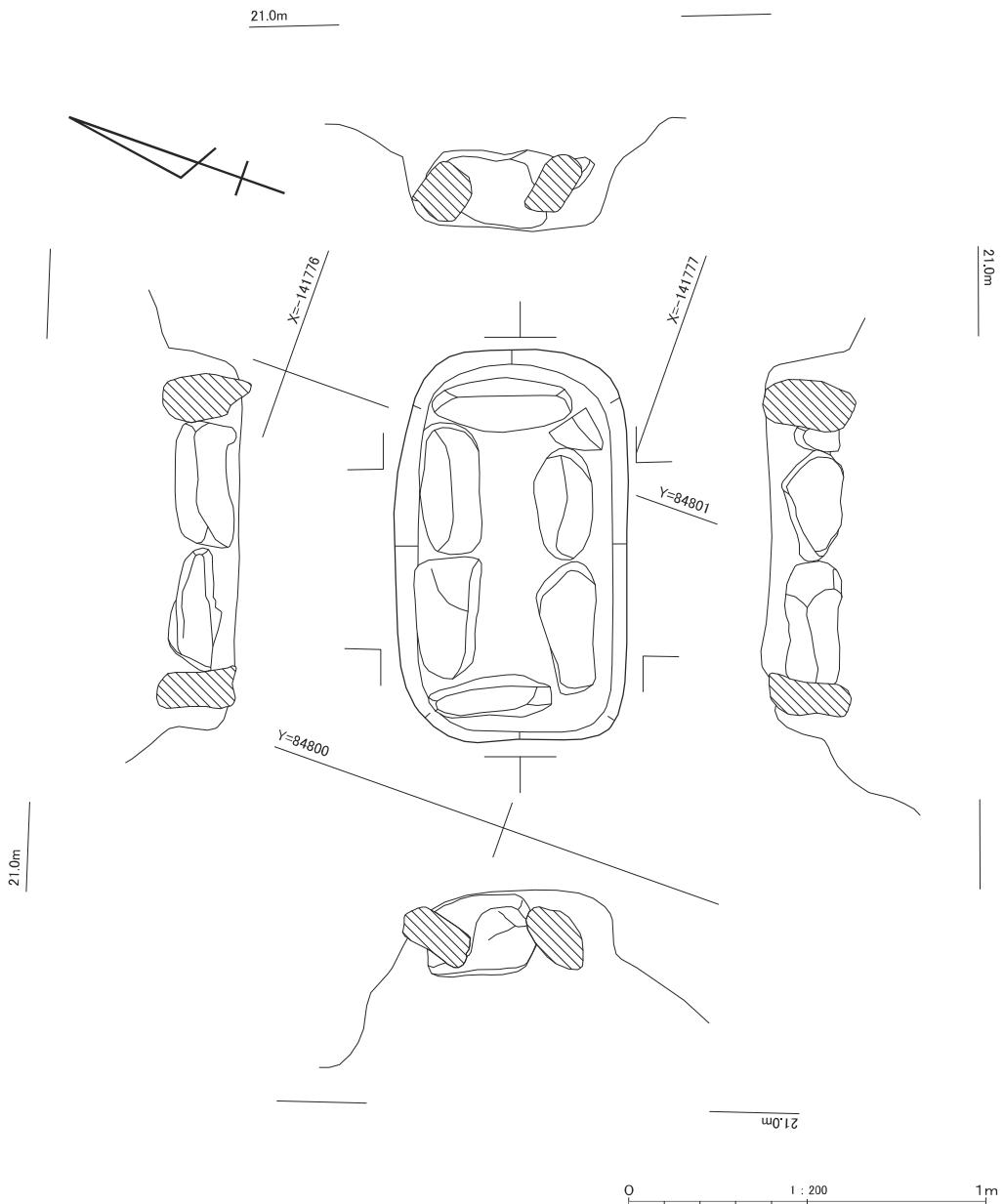


図18 ST301 平・断面図 (Scale 1:20)

各石の隙間は褐色シルト質土を詰めて固定している。底石は存在しない。北・南側の側石共に北から南に向かってやや傾いていることから、上部を土石流で流されたと考えられる。

4) 土坑

SK301

調査区の北側で検出した、平面形状が隅丸方形を呈す浅い土坑である。北辺を搅乱で削平されており、検出長は南北 0.5 m、東西 0.5 m、深さ 0.15 m を測る。

5) ピット

SP301～307

調査区の北側で検出した、平面形状は円形を呈す浅いピットである。直径約 20～80cm、深さ 5～15cm を測る。建物としてはまとまらない。

第6節 第4遺構面 弥生時代後期

褐色シルト質土を掘削後、黄褐色粘質土上面で検出した遺構面で、遺構は竪穴建物1棟、ピット9基を検出した。遺構面上からは、大型蛤刃石斧と思われる石製品の基礎部が出土している。また、調査区の北西部で拳大から人頭大の大きさの石を複数検出した。北西から南東方向に並んでいるため、土石流の痕跡と考えられる。遺構面上および遺構内から出土した遺物から、弥生時代後期の遺構面と考えられる。

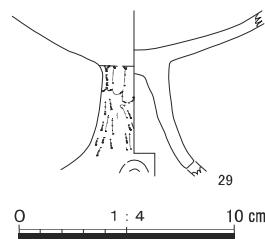


図19 第4遺物包含層出土遺物実測図
(Scale 1:4)

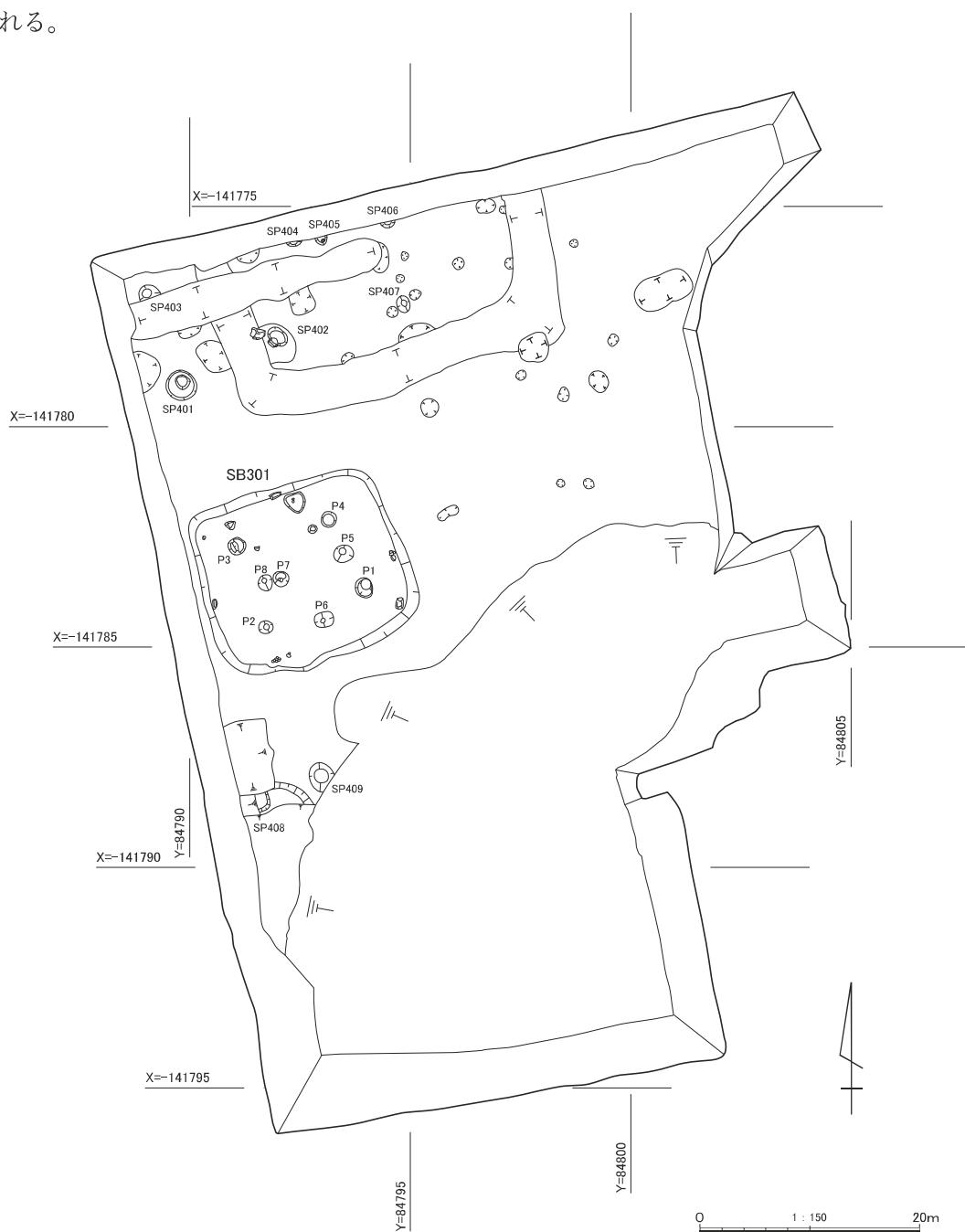
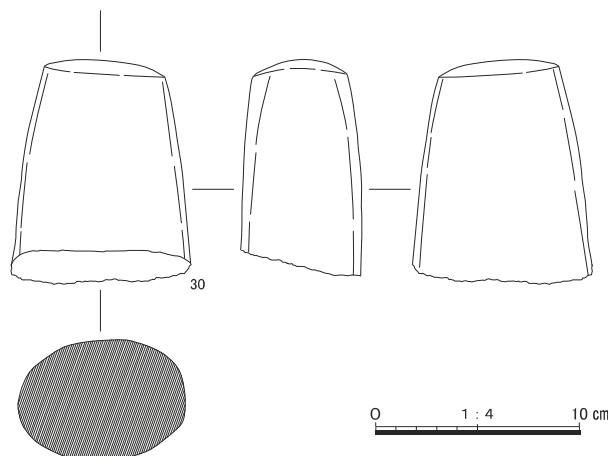


図20 第4遺構面平面図 (Scale 1:150)



29は第4遺物包含層である褐灰色シルト質土から出土した弥生土器高環である。脚端部は未広がりで3方向の透孔を穿つ。30は第4遺構面である黄褐色粘質土に刺さった状態で出土した大型蛤刃石斧の基部である。断面は橢円形を呈す。

図21 第4遺構面出土遺物実測図 (Scale 1:4)

1. 第4遺構面の遺構と遺物

1) 竪穴建物

SB401

調査区中央部西側、第2遺構面で検出したSB201、SX201の下層で検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸方形で、南北約4m、東西約5m、検出面からの深さは約30cmを測る。床面から柱穴を8基検出している。埋土および床面から弥生時代後期の土器が出土している。

SB401 - P1～P4

建物の4隅に並ぶ柱穴である。平面形状は円形、断面形状は浅いU字形を呈する。直径約40cm、検出面からの深さは約10cm、柱間約2mを測る。

SB401 - P5

建物の東辺中央部で検出した柱穴である。平面形状は円形、断面形状は検出面から10cmで東側が1段深くなる。直径約40cm、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土から弥生時代後期の甕の破片が出土している。

SB401 - P6

建物の南辺中央部で検出した柱穴である。平面形状は円形、断面形状は西側が深いV字形を呈する。直径約40cm、検出面からの深さは約15cmを測る。

SB401 - P7、P8

建物の中央から西よりで検出した、東西に隣接する2つの柱穴である。平面形状は円形、断面形状はU字形を呈する。直径約40cm、検出面からの深さは約10～15cmを測る。

31は大型高環である。环底部はゆるく立ち上がり、口縁部が強く外反し口縁端部は丸くおさめる。环底部は円盤充填により閉塞を行う。32は高环脚部である。脚部は外反して開き、穿孔数は不明であるが透孔を穿つ。33は壺類である。胴部のみの出土であるため詳細な器形は不明である。胴部上半にスヌの付着が確認できる。34と35は甕である。34は胴部が長胴であり頸部が「く」字状に屈曲する。口縁端部に浅い凹線を1条施す。35は頸部で屈曲したのち口縁部が外反して立ち上がり口縁端部に面をもつ。36は台石である。上面と下面に凹みを確認できるが顕著な研磨痕跡はみられない。

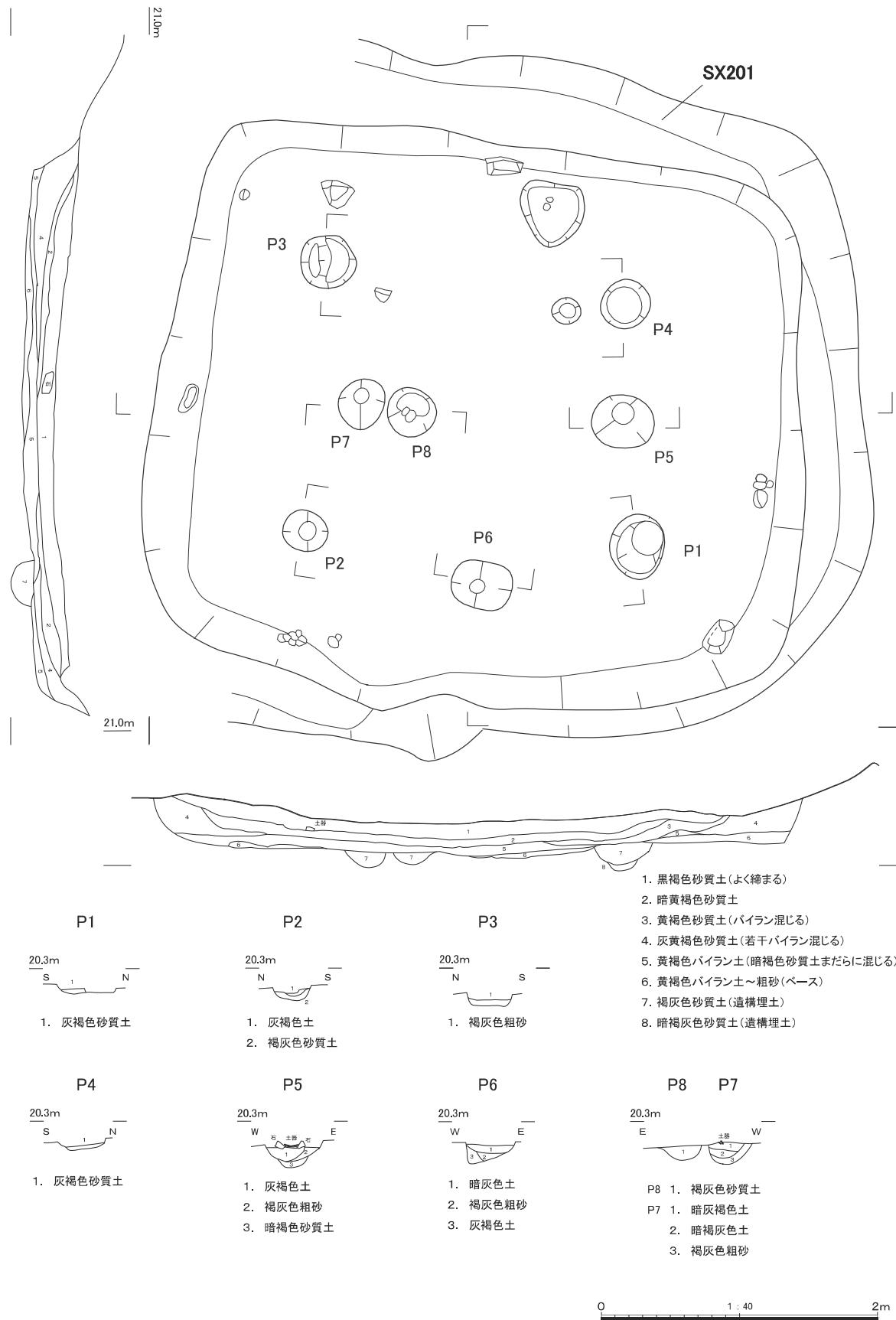


図 22 SB401 平・断面図 (Scale 1:40)

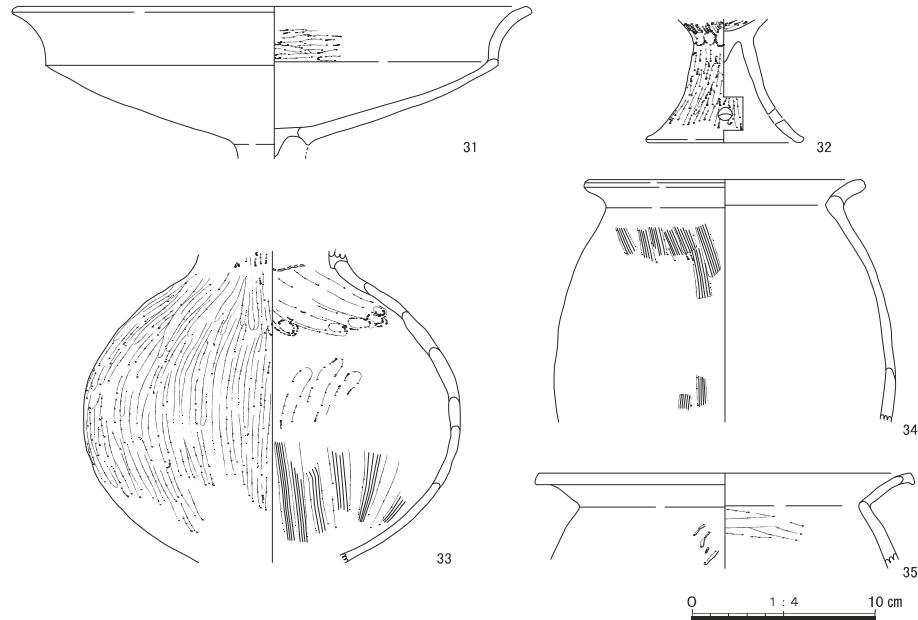


図23 SB401出土遺物実測図(1) (Scale 1:4)

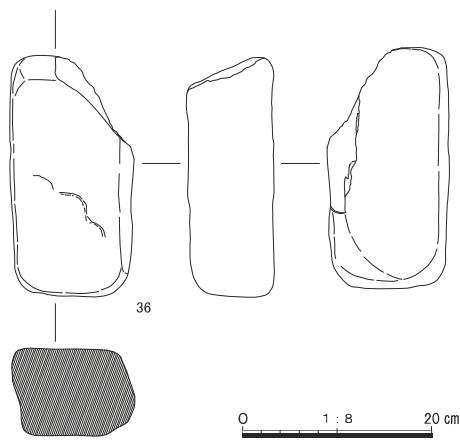


図24 SB401出土遺物実測図(Scale 1:8)

2) ピット

SP401

調査区北側で検出したピットである。平面形状は円形、断面形状は検出面から25cmで東側が1段深くなる。直径約60cm、深さ約45cmを測る。

SP402～407

調査区北側で検出したピットである。平面形状は円形、断面形状は浅いU字状を呈す。直径約20～80cm、深さ5～15cmを測る。

SP408

調査区南側で検出したピットである。平面・断面形状が隅丸方形を呈する。北側および西側を攪乱で削平されている。検出された南北長40cm、東西長30cm、深さ5cmを測る。

SP409

調査区南側で検出したピットである。平面形状が円形、断面形状がU字状を呈する。南東側を第3遺構面で検出した1号墳の周溝で削平されている。直径約50cm、深さ約20cmを測る。

SP401～409は、掘立柱建物としてまとまらない。

表2 出土土器観察表

掲載番号	遺物名	出土地点	計測値(cm)			調整 (上:内面、下:外面)	色調 (上:内面、下:外面)	胎土	焼成	残存率	備考
			口径	底径	高さ						
1	土師器 高台付塊	SP110	(13.8)	(6.4)	3.9	ナデ、ロクロナデ ナデ、ロクロナデ	2.5YR6/8(橙)、7.5YR(にぶい橙) 2.5YR6/6~8/8(橙)	白色粒:(~0.5)少、金雲母: 微	良好	口縁10%、 底100%	高台削り出し
2	土師器 皿	SP110	(13.2)	-	<1.8>	ユビナデ ユビナデ	7.5YR8/6(浅黄橙) 5YR7/6(橙)	石英:(~0.5)微、白色粒:(~ 1.0)微	良好	口縁~体 30%	
3	土師器 皿	SP110	(11.6)	-	1.8	ユビナデ ユビナデ	7.5YR8/4(浅黄橙) 5YR8/4(浅橙)	クサリ礫:(~2.0)微、チャ ート:(~0.5)微、石英:(~0.5) 微	良好	全体)25%	
4	土師器 釜	第2遺物 包含層	(25.2)	-	<8.4>	板ナデ、ユビナデ ハケ、板ナデ、ユビナデ	7.5YR6/3(にぶい褐)~4/3(褐) 7.5YR6/4(にぶい橙)・5/4(にぶい褐)	白色粒:(~0.5)少、金雲母: 少	良好	口縁)30%	
5	須恵器 壺H	第2遺物 包含層	11.3	-	3.2	ロクロナデ ロクロナデ、回転ヘラケズリ	7/N(灰白) 6/N(灰)	白色粒:(~0.5)少、黑色 粒:(~0.5)少	良好	全体)30%	
6	須恵器 塊	第2遺物 包含層	9.1	3.7	6.1	ナデ消し 手持ちヘラケズリ、櫛描波状文、 ナデ消し	N5/(灰) N5/(灰)	黒色粒:(~1.0)	良好	全体)100%	
7	須恵器 壺類	第2遺物 包含層	-	(9.4)	<7.8>	ロクロナデ ロクロナデ	2.5Y5/1(黄灰) 5Y4/(灰)	白色粒:(~0.5)少	良好	胸部)35%、 底)5%	高台貼り付け
8	土師器 壺	SB201	(13.6)	-	<6.1>	不明	5YR6/8(橙)	白色粒:(~0.5)少	やや 不良	全体)40%	
9	土師器 壺	SB201	(16.0)	-	<3.4>	ミガキ 不明	5YR6/6(橙) 5YR6/4(にぶい褐)	白色粒:(~0.5)少、長石:(~ 0.5)微	良好	口縁)5%	
10	土師器 小型甕	SB201	(12.0)	-	<8.5>	ハケ、ユビナデ ハケ、ユビナデ	2.5YR5/2(赤灰)~3/2(暗赤褐) 2.5YR6/6(橙)	砂粒:(~2.0)多	良好	口縁~体上 半)20%	
11	土師器 小型甕	SB201	(12.2)	-	<6.5>	ユビナデ ユビナデ	2.5YR6/6(橙) 2.5YR6/6(橙)~5/6(明赤褐)	クサリ礫:(~1.5)多、長 石:(~0.5)微、その他砂 粒:(~0.5)多	やや 不良	口縁~体上 半)25%	軟質
12	土師器 甕	SB201	(33.4)	-	<10.2>	ケズリ、ユビナデ ハケ?、ユビナデ、ユビオサエ	2.5YR6/8(橙) 5YR6/8(橙)	金雲母:少、その他砂粒:(~ 0.5)少	良好	口縁)20%	やや軟質
13	土師器 甕	SB201	(23.2)	-	<7.7>	板ナデ、ユビナデ ハケ、ユビナデ	7.5YR7/4(にぶい橙) 7.5YR8/4(浅黄橙)・6/4(にぶい褐)	金雲母:微、長石:(~0.5) 微	良好	口縁)5%	
14	須恵器 壺H	SB201	(9.0)	(5.9)	<3.1>	ロクロナデ ロクロナデ、回転ヘラケズリ	N7/(灰白) N5/(灰)	白色粒:(~0.5)微、小礫:(~ 10.0)少量	良好	全体)40%	
15	土師器 塊	1号墳 周溝	13.6	6.4	3.7	ユビナデ ユビナデ	5YR7/6~6/6(橙) 5YR7/6~6/6(橙)	クサリ礫:(~1.0)微、白色 粒:(~0.5)微	良好	口縁~体)30%、 底)100%	外面部無調整、 巻き上げ痕を残す
16	土師器 塊	1号墳 周溝	(13.8)	9.6	<3.5>	ロクロナデ ロクロナデ	7.5YR8/6(浅黄橙)・7/6(橙) 7.5YR7/4(にぶい橙)・7/6(橙)	金雲母:微、長石:(~0.5)微、 白色粒:(~0.5)少	良好	口縁~体 30%	やや軟質
17	土師器 塊	1号墳 周溝	(20.0)	-	<5.5>	ナデ、ミガキ ナデ	7.5YR7/6(橙) 7.5YR8/6(浅黄橙)・7/6(橙)	長石:(~0.5)微量、白色 粒:(~0.5)少	やや 不良	口縁~体 25%	黒色土器の可能 性あり
18	土師器 小型甕	1号墳 周溝	8.3	-	9.2	ユビナデ、ナデ ナデ	5YR5/6(明赤褐) 7.5YR5/4(にぶい褐)	白色粒:(~0.5)少、その他 砂粒:(~1.0)少	良好	口縁部)95%、 体~底部)55%	周溝底面付近か ら出土
19	土師器 直口壺	1号墳 周溝	8.9	-	<8.3>	ユビナデ、ユビオサエ ユビナデ	5YR6/6(橙) 5YR7/8(橙)	黒褐色粒:(~0.5)少、白色 粒:(~0.5)微、その他砂 粒:(~1.0)少	良好	口縁部)99%、 肩部)85%	
20	土師器 甕	1号墳 周溝	17.2	-	<10.1>	ユビナデ タタキ、ユビナデ	5YR7/6~7/8~6/6(橙) 5YR7/6~6/6(橙)	クサリ礫:(~1.5)多、白色 粒:(~0.5)少	良好	口縁~頸 90%、肩~底)70%	やや軟質
21	円筒埴輪	1号墳 周溝	-	-	<6.3>	ナデ、ハケ ナデ	7.5YR5/6(明褐) 7.5YR5/6(明褐)	石英:(~0.5)微、チャ ート:(~0.5)微	良好	-	
22	円筒埴輪	1号墳 周溝	-	-	<6.3>	ナデ、ハケ ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙) 10YR8/4(浅黄橙)	長石:(~0.5)少、白色粒:(~ 0.5)微	良好	-	外面赤絞塗布、 やや軟質
23	円筒埴輪	1号墳 周溝	-	-	<6.1>	ナデ、ハケ ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙) 10YR8/4(浅黄橙)	長石:(~0.5)少、白色粒:(~ 0.5)微	良好	-	外面赤絞塗布、 やや軟質
27	弥生土器 有稜高环	SB202	(26.8)	-	<3.9>	ナデ ナデ~ミガキ	7.5YR4/2(灰褐) 7.5YR3/1(黑褐)	クサリ礫:(~2.0)少、金雲 母:少、その他砂粒:(~1.0) 多	良好	口縁部)10%	
28	弥生土器 甕	2号墳 周溝	(16.0)	-	<2.0>	ナデ ナデ	7.5YR7/6(橙) 7.5YR7/4(にぶい橙)	チャート:(~0.5)少	良好	口縁部)15%	
29	弥生土器 高环	SB401	(8.0)	-	<6.7>	不明 ユビオサエ、ナデ、ミガキ	2.5YR6/6~6/8(橙) 2.5YR5/6(明赤褐)	長石:(~0.5)少、白色粒:(~ 0.5)微、その他砂粒:(~2.0) 多	良好	脚柱部) 95%、 环底部)90%	
31	弥生土器 有稜高环	SB401	(28.2)	-	<8.1>	ミガキ ナデ	2.5YR6/8(橙) 2.5YR6/6~6/8(橙)	石英:(~0.5)微、その他砂 粒:(~2.0)多	良好	坏底部) 60%、 口縁部)10%	
32	弥生土器 高环	SB401	-	-	<7.6>	ナデ ミガキ、ユビオサエ	2.5YR6/6(橙) 5YR7/6~6/6(橙)	クサリ礫:(~2.0)微、白色 粒:(~0.5)微	良好	脚柱部) 20%、 脚端部)10%	
33	弥生土器 壺類	SB401	-	-	<17.3>	ユビオサエ、ナデ消し ミガキ、ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)~7/6(明黄 橙) 7.5YR5/4(にぶい褐)~6/4(にぶい橙)	石英:(~0.5)微、その他砂 粒:(~2.0)少	良好	胸部)35% 肩部ス付着	
34	弥生土器 甕	SB401	(15.0)	-	<13.4>	ナデか ナデ、ハケ	5YR6/4(にぶい橙)~5/2(灰褐) 7.5YR7/3(にぶい橙)~5/3(にぶい褐)	白色粒:(~0.5)少、その他 砂粒:(~0.5)少	良好	口縁~頸部 5%、 胸部)20%	
35	弥生土器 甕	SB401	(20.6)	-	<5.2>	ハケ ナデ、タタキナデ	2.5YR6/6~6/8(橙) 2.5YR5/6(明赤褐)	長石:(~2.0)多、白色粒:(~ 0.5)微、その他砂粒:(~2.0) 多	良好	口縁~頸部 25%	やや軟質

表3 出土鉄器および石器観察表

掲載番号	遺物名	計測値(cm)			重量(g)	残存率	備考
		長	幅	厚			
24	鉄製U字型鈎先	<10.0>	2.5	0.4	32.7	全体)40%	
25	鉄製刀子	<10.1>	1.4	0.4	9.8	全体)99%	
26	鉄鎌	<3.5>	-	0.4	1.2	不明	茎部のみ
30	大型蛤刃石斧	<8.4>	<5.8>	4.6	454.2	全体)50%	
36	台石	25.3	13.2	9.6	5723.0	全体)85%	花崗岩製

第3章 まとめ—住吉宮町遺跡第56次調査の成果概要—

第1節 各時代の遺構

はじめに 今回の調査では平安時代1面、飛鳥時代1面、古墳時代中期1面、弥生時代後期1面の合計4面の遺構面を確認した。

平安時代 第1遺構面では鋤溝および溝を検出しており、この時期において本調査地は耕作域であったことをうかがわせる。

飛鳥時代 第2遺構面では飛鳥時代の竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟を検出した。掘立柱建物であるSB202は、柱穴内から年代を推定できる土器の出土がなかったため、時期は不明である。しかし、竪穴建物であるSB201からは、カマド周辺でまとまった数の土器が出土した。土器の組成は土師器壇・甕、須恵器环身Gである。須恵器环身は、口縁部が受部よりも上位に位置することから、飛鳥II～III様式に属すると考えられ、土師器壇の形態等とも齟齬がないため、この頃のものと位置付けられよう。本調査地の西側で実施した第17次調査では、6世紀末～7世紀初頭の竪穴建物16棟を検出している。このうち、5棟の竪穴建物でカマドを確認したが、いずれも北辺中央部に設置していた。今回の調査で検出したSB201も同様である。本調査地周辺では竪穴建物および掘立柱建物を複数検出しており、密度の高い集落域を形成していたものと考えられる。

古墳時代 第3遺構面では古墳時代中期と推測される古墳2基(SZ301：1号墳、SZ302：2号墳)と箱式石棺1基を検出した。今回の1号墳および2号墳の発見によって住吉宮町遺跡で確認した古墳総数は83基となった。1号墳は、大部分が調査区外に及ぶため全容は明らかではないが、飛鳥時代の洪水によって堆積した土砂により葺石や墳丘が良好に残存していた。本古墳の復元した円丘部径は約18mであり、これは第9次調査で検出した住吉東古墳の円丘部と同規模である。本古墳の周溝内で鉄製品や土師器が出土したが、いずれも本古墳に帰属するものは不確定であり、築造年代を決定づける資料を得ることができなかった。また、埴輪片が周溝内から出土しているが、流れ込んだものと考えられ、本古墳の北側に未知の古墳が存在する可能性が指摘できる。2号墳の周溝内から弥生土器の大型高杯と甕片が出土しているものの、いずれも小片であり1号墳と同様に築造年代を示すものではないと考えられる。本調査地周辺では、第2次調査の6号墳(長さ3m)や7号墳(同7.5m)、第1次調査の11号墳(4m)といった葺石を葺かない小型墳があり、これらに類するものを推測される。第2次調査7号墳は木棺直葬で、埋葬施設内から出土した須恵器からTK208型式とされ、同6号墳は墳丘同士の切り合い関係からTK23・47型式以降のものとされており、墳丘の規模感のみで築造年代を決定できないことを示す。2号墳の築造年代は現状ではが不明と言わざるを得ないが、今後の調査によって明らかになることが期待される。

住吉宮町遺跡において、墳丘を伴わない箱式石棺はこれまで15基が知られていたが、今回のST301の発見により16基目の事例となった。箱式石棺は第4次調査で3基、第5次調査で2基、第32次調査で9基、第50次調査で1基がそれぞれ確認されており、その分布には偏りがあることがわかる。分布状況を確認すると、現在の本住吉神社の東側には谷状地形となっており、第32次調査の箱式石棺はこの谷に近い位置にまとまって検出されている。また、第50次調査地から谷状地形の間で古墳は確認されていない。今後の調査成果により状況が変わる可能性を残すものの、古墳の築造に向かない谷状地形に近い位置を選んで、

箱式石棺墓を設け、古墳の築造域とは区別した可能性も指摘できよう。

弥生時代 弥生時代の竪穴建物は、本調査地の南側に位置する第11次調査や第27次調査、第33次調査で確認されている。本調査地より北側での検出例はなく、今回の発見が住吉宮町遺跡における北限の事例となった。今回のSB401内では壺・甕・高杯といった土器のほか、台石と推定される石器が出土しており、日常の生活に使用したものと考えられる。出土した甕にタタキを施すことから弥生時代後期（V様式）に属すると考えられる。住吉宮町遺跡ではこの時期の竪穴建物の事例は少なく、当該期における土地利用を考察していくには、今後の調査成果の蓄積が待たれる。

小結 今回の調査によって、住吉宮町遺跡における各時期の様相がより明らかとなった。旧耕作土層以下に複数回の洪水層が確認でき、洪水の発生に伴い集落、墓域、耕作域と使用用途を変更した様子がうかがえる。このように、今回の調査によって各時期の遺跡空間利用と変遷を考えるうえで重要な成果を得たといえる。

第2節 1号墳の住吉宮町古墳群における位置付け

前述の通り、今回の発掘調査によって得た成果は多岐にわたるが、とくに重要な成果となるのが、1号墳の発見である。以下に本古墳について多少の考察を加えることとする。

築造年代 1号墳の築造年代は前述の通り不明である。1号墳からは円筒埴輪の樹立もなく、周溝内に供献土器もなく、埋葬施設も検出できなかつたため、本墳に伴う遺物は得られていない。周溝内から出土した土師器甕は、やや長胴化しており、口縁端部はやや肥厚するものの、面取りは不明瞭であるなど退化していることから、布留式期IVの後半段階のものと考えられる（米田 1990・1991）。この土師器甕は、周溝底から洪水砂が50cm程度堆積したのに転がり込んだものであり、古墳の築造年代を示すとは断言しがたい。

しかし、住吉宮町遺跡内で確認された古墳群（以下、「住吉宮町古墳群」と呼称する）では、古い段階に築造されたものほど葺石の葺き方が丁寧で、徐々に粗雑化傾向にあることが指摘されており（安田編 2001）、5世紀初頭に築造された第52次調査1号墳と、5世紀後葉に築かれた住吉東古墳とでは、後者が帆立貝形古墳であるにもかかわらず、明らかに葺石を葺く工程を省略した様子がみてとれる。今後の検討を大いに残すものの、現状では5世紀前半の築造と推測したい。

墳丘形態 1号墳は円丘部分の約3分の1程度が発掘調査によって明らかになったに過ぎない。1号墳の墳形は円墳であるが、本墳の大部分は調査区外に位置しており全容は明らかとなっていない。住吉宮町古墳群で発見された総数83基のうち、円墳は2基のみであり、本古墳において円墳は極めて珍しい。一方で、前方後円墳は1基（坊ヶ塚古墳；全長57m）、帆立貝形古墳は1基（住吉東古墳；全長24m）確認されており、坊ヶ塚古墳は葺石、住吉東古墳は墳頂部と斜面との境に石を並べた列石を施す。また、古墳群内の円墳で葺石を施し

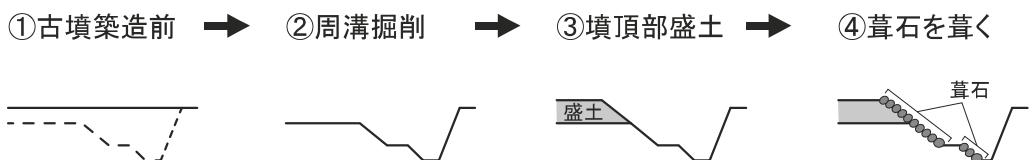


図25 1号墳墳丘築造過程模式図

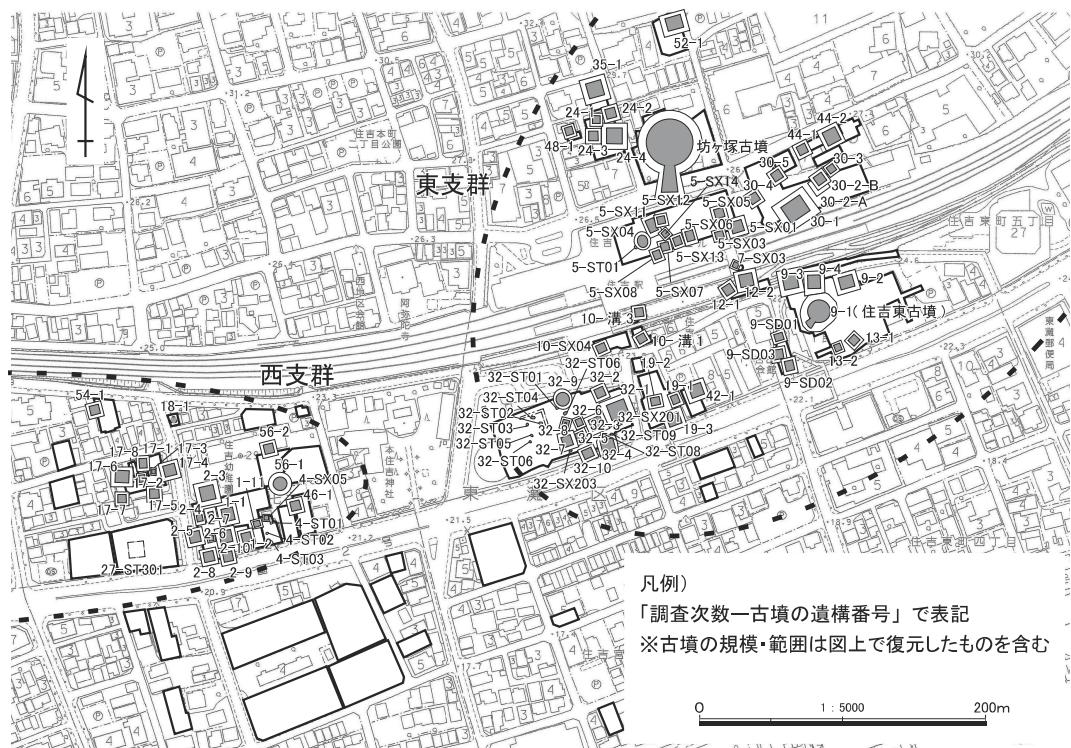
第2節 1号墳の住吉宮町古墳群における位置付け

たものはない。1号墳の円丘部径や葺石の存在を勘案するに、本古墳は前方後円墳ないしは帆立貝型古墳である蓋然性は高いものと考えられる。

葺石の葺き方 1号墳は墳丘が洪水砂によって埋没し、葺石の葺き方が復元できるほど良好な状態で発見された。葺石は長さ40cm×20cm程度の長方形の石材と、15cm程度の円～楕円形の石材とが使用される。まずは前者を基底石として長辺部分を寝かせた状態で横方向に並べ、次に後者の石材を、長軸を墳丘に刺す形で下方から順に縦方向に葺く。80cm～100cmの間隔で目地の基準となる石列を斜面方向に並べ、最後に目地間を後者の石材で充足する。裏込石はなく、廣瀬覚によるc類に分類される（廣瀬2011）。なお、本墳の特筆点として、墳頂部分のみ直線状に葺石の石材が並ぶことが上げられる。墳丘上段の基底石まで円形を志向していたのに対し、墳頂部のみ多角形を志向していたようであるが、その理由には不明であり、今後の調査の進展に期待したい。

古墳の構築方法 1号墳は現地保存を行ったため、墳丘全体の立ち割りを行っていない。しかし、部分的に最小限の立ち割り調査を行っており、テラス部分は外堤側より低く、墳丘部分の盛土は20cm～30cmと極低いことが判明した。このことから墳丘構築方法について、以下の通り復元できる。
 ①墳丘下段～上段の途中までを成形しながら周溝部分を掘削する。
 ②墳頂部分のみ盛土を施す。
 ③葺石を葺く。これ以降に埋葬移設を設けたものと推測されるが、埋葬移設は検出されなかったため不明である。

住吉宮町遺跡の支群分け 住吉古墳群における古墳の分布を見てみると、現在の本住吉神社の東側にみえる谷状地形を境に東西にわけることができる。本稿では便宜的に谷状地形より東側の古墳を「東支群」とし、谷状地形よりも西側を「西支群」としてそれぞれ一括りとする。



る。東支群には、住吉宮町古墳群最古の古墳である第52次調査1号墳や、坊ヶ塚古墳、住吉東古墳が含まれる。坊ヶ塚古墳の年代観も定かではないものの、基本的には古墳群の築造開始から終焉までの約100年の間、連綿と古墳を築き続けたものと考えることができる。一方、西支群は最も古いものでTK208型式（5世紀中頃）であり、古墳の築造数も東支群に比べて少ない。以上の状況から、西支群に比して東支群が優勢かつ古墳の墳形や石棺墓を含めた墓制の重層性がみえる印象を受ける。しかし、今回の1号墳の発見により、西支群においても墳丘形態が複数あることが判明した。1号墳の築造年代が不明であるため判然としないが、住吉宮町古墳群において、古墳の築造開始が東支群のみではなく、西支群も含めて多発的であった可能性も指摘できる。推論に推論を重ねた予察的な内容となつたため、十分にまとめ切れていない部分があるが、今後の発掘調査によって西支群の築造開始年代が明らかとなれば、住吉宮町古墳群の様相解明に向けて大きな手がかりを得られよう。

第3節 1号墳の現地保存

1号墳は、洪水砂の堆積が結果的に保護層の役割を果たしており、良好な状況で墳丘が保たれていた。これを受けて、神戸市文化スポーツ局では本墳を現地保存に値する遺構として評価し、令和3年5月に事業主体局である神戸市こども家庭局ならびに社会福祉法人住吉むつみ会と協議を行った。古墳が位置する場所は園庭部となること、建物建設に際し充分な地盤強度をもつことから、古墳の大部分を損壊せずに工事施工が可能となることが確認された。その後、建物基礎により影響を受ける範囲において記録保存調査を実施し、その他の範囲は、墳丘保護のために土嚢および真砂土による養生を行った。真砂土による保護層は30cm程度であり、その上に当初掘り出した残土を被せて埋め戻しを行い、遺構の現地保存作業を完了した。



写真5 土嚢および真砂土による養生作業

年代	20m~	10m~	5m~	~5m	規模不明	箱式石棺
~5C前 (~TK216)	●		■ 52-1			
5c中 (TK208)	坊ヶ塚?	56-1? 30-2-b 32-1 32-2 24-4	■■■ 2-4 2-7 24-1 32-5	○ 17-8	□□ 2-8 2-10 35-1	
5c後 (TK23~47)	住吉東 (9-1)	■■■ 54-1 17-6 46-1 5-SX11 9-2 9-3 19-3 30-1 32-3 32-4 32-10	■■■ 17-2 5-SX01 24-2 5-SX02 24-3 5-SX07 30-4 5-SX13 32-6 9-SD03 42-1 10-SX04	■ 11-SX03	■ 13-1	4-ST01 4-ST02 4-ST03 32-ST08
6c前半 (MT15 ~TK10)		■ 9-SD01	■■ 5-SX12 9-SD02		● 32-9	● 32-SX20
6c後半 (TK43~)		■■ 9-4 32-7	■ 5-SX14 32-8 32-9		○ 18-1	

※年代のわかる古墳のみ記載。破線は墳形不明。
(凡例)黒塗:東支群 白抜:西支群 ?:年代が不明瞭
(例)第56次調査1号墳→56-1と記載

図27 住吉宮町古墳群の年代ごとの古墳数



図28 現地保存した古墳の範囲 (Scale 1:300)

第4章 おわりに

今回の発掘調査では、弥生時代後期、古墳時代中期、飛鳥時代、平安時代における住吉宮町遺跡の様相を考えるうえで重要な遺構ならびに遺物を得ることができた。また、これまでの本遺跡における調査成果を概観し、今回の調査の結果をささやかではあるが意義付けることができた。しかし、住吉宮町遺跡は神戸市東灘区を代表する遺跡であり、可住地の狭い同地域において、連綿と人々が生活を営んだことは想像に難くない。筆者の力不足により検討を加えることができなった部分については、今後加わるであろう新たな検討材料によって、引き続き探求されることを期待する。

本発掘調査は2020（令和2）年の3月から6月まで行われ、報告書の刊行に至るまで3年もの時間を費やすこととなった。当初から発掘調査にあたっていた調査担当者が交替し、引き継いだ担当者も引き続き他の発掘調査を担当していたことから、本報告書の刊行を1年先延ばし2022（令和4）年の3月とする計画を立てた。しかし、事業主体である神戸市こども家庭局と調整したうえで、刊行が本年となった次第である。また、1号墳は住吉宮町遺跡のみならず東灘区の古墳時代の様子を物語る遺構として、現地保存することとなった。これについて、新築建物の構造や配置等を再検討していただくなど、文化財保護への理解と格別な協力を賜った社会福祉法人住吉むつみ会に対して大いに感謝を申し上げる。

本報告書が地域の歴史を考えるうえで活用いただけるのであれば望外の喜びであるとともに、今後の発掘調査成果の積み重ねにより、住吉宮町遺跡の様相が明らかとなることを期待したい。

【参考文献】

弥生土器について

黒田恭正 2005「神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第V様式～布留式並行期の土器様相」『森南町遺跡発掘調査報告書－第1・2次調査－』神戸市教育委員会

森田克之 1990「摂津地域」『弥生時代の様式と編年－近畿地方II－』木耳社

古墳時代土師器について

森岡秀人・竹村忠洋 2006「摂津地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

米田敏行 1990「中南河内地域の『布留系』土器群について」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会

米田敏行 1991「土師器の研究 近畿」『古墳時代の考古学6 土師器と須恵器』雄山閣

古墳時代須恵器について

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

飛鳥時代土器について

古代の土器研究会編 1998『7世紀の土器 近畿西部編』古代の土器5－2

西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

平安時代土器について

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀－』京都編集工房

その他

西本昌司 2023『くらべてわかる岩石』山と渓谷社

廣瀬覚 2011「葺石と段築成」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭礼』同成社

安田滋編 2001「まとめ」『住吉宮町遺跡 第24次調査・第32次調査－阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』神戸市教育委員会

写真図版

カラー図版1



1. 1号墳（SZ301）全景（北東から）

カラー図版2



1. 1号墳（SZ301）全景（北西から）



1. 第56次調査出土古墳時代遺物

図版 1



1. 第1遺構面全景（北西から）



2. 第2遺構面全景（北西から）



3. SB201 土器出土状況（南東から）

図版2



1. SB201 全景（北から）



2. SB202 全景（北から）



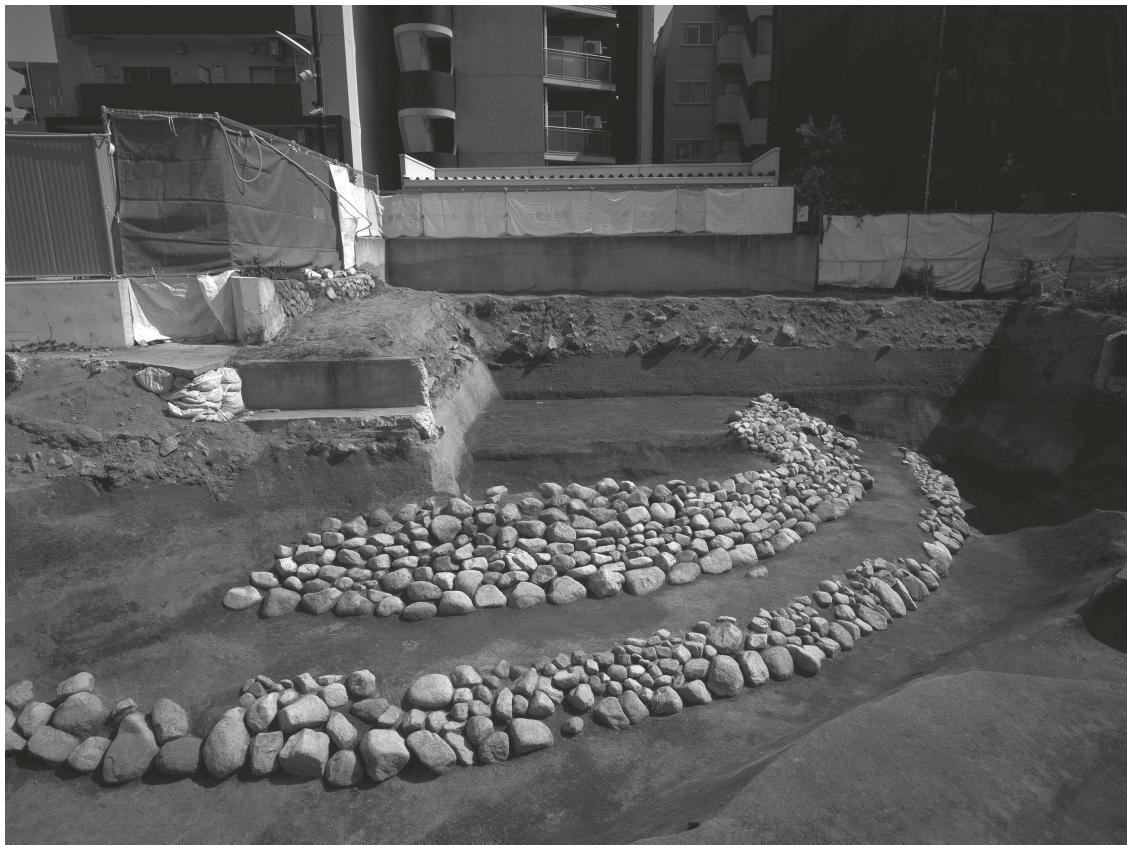
3. 第3遺構面全景（北から）

図版3



1. 第3遺構面空中写真（俯瞰モザイク写真）

図版4



1. 1号墳（SZ301）全景（北西から）



1. 1号墳（SZ301）全景（西から）

図版5



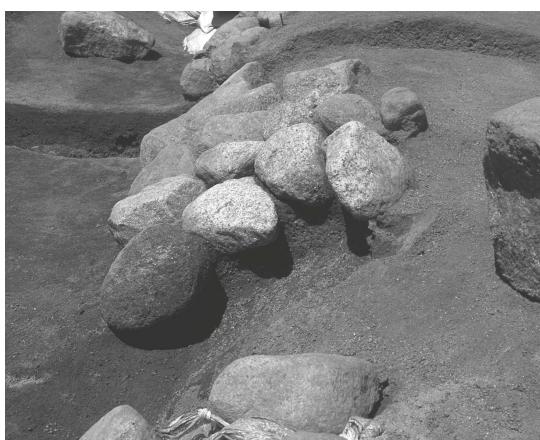
1. 1号墳（SZ301）周溝内土器出土状況（北から）



2. 1号墳（SZ301）周溝西側土層断面（北西から）



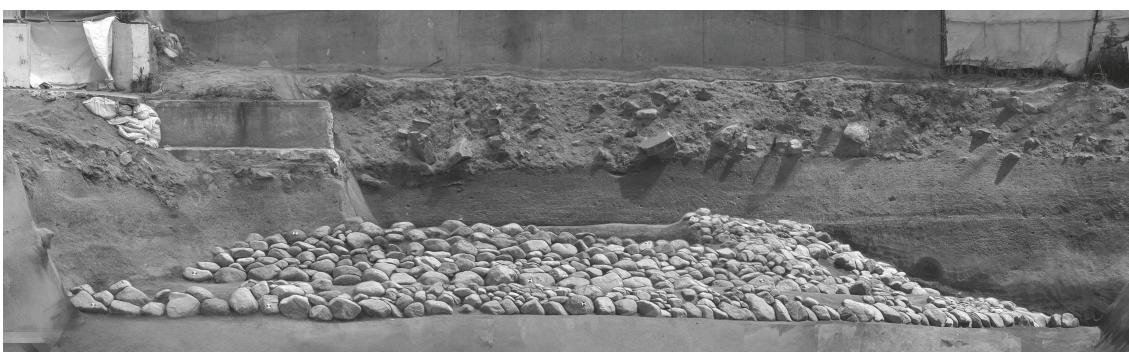
3. 1号墳（SZ301）墳丘上段立ち割り状況（北から）



4. 1号墳（SZ301）墳丘下段立ち割り状況（西から）



5. 1号墳（SZ301）墳丘オルソ写真（西から）



6. 1号墳（SZ301）オルソ写真（北から）

図版 6



1. 2号墳 (SZ302) 全景 (南西から)

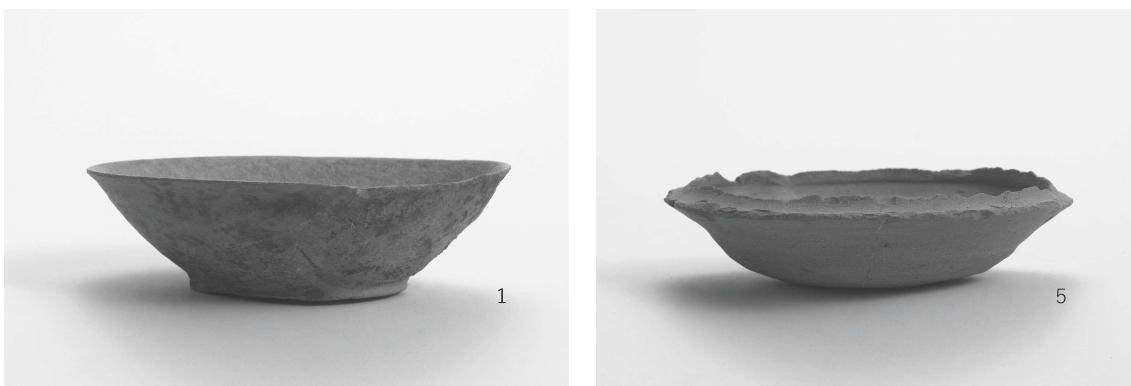


2. ST301 全景 (北東から)



3. SB401 全景 (南西から)

図版 7

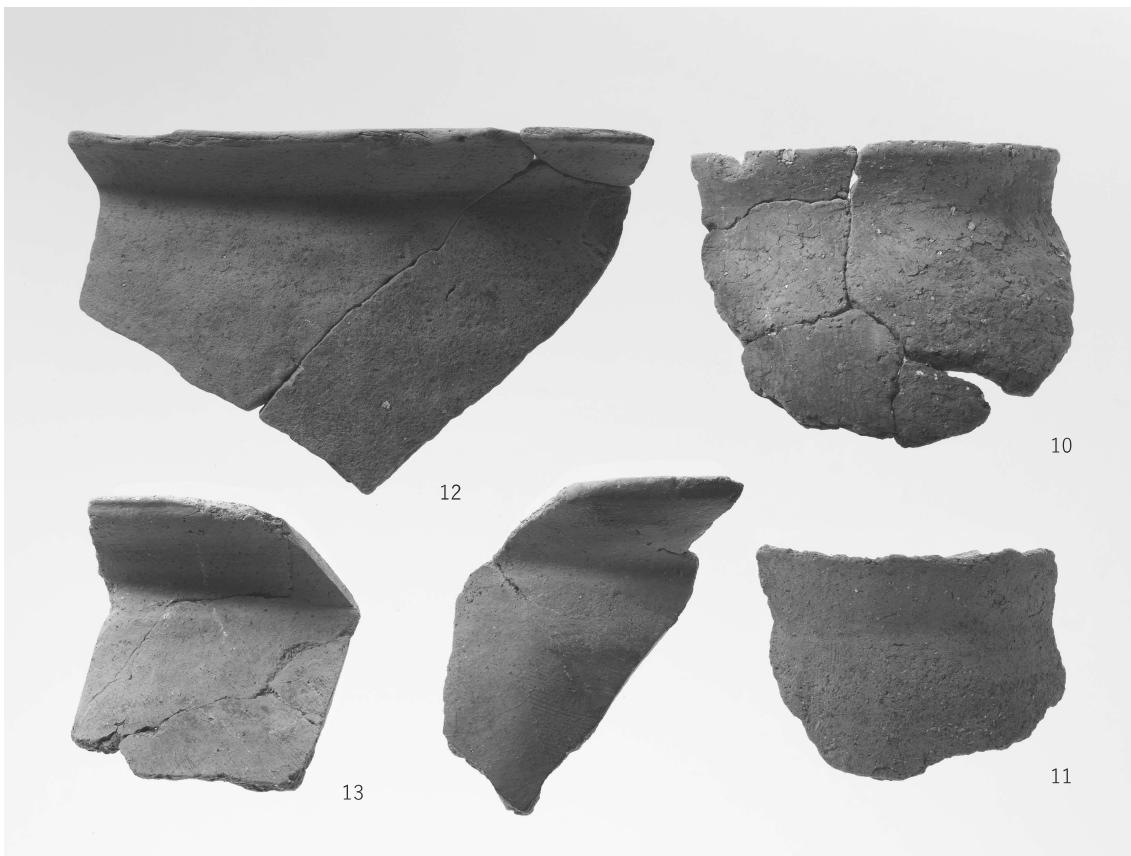


2. SB201 出土土器 (1)



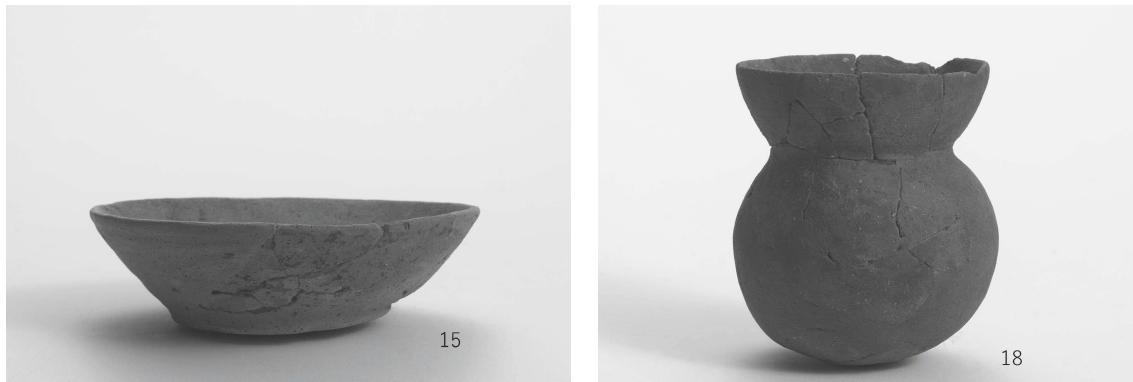
3. SB201 出土土器 (2)

4. SB201 出土土器 (3)



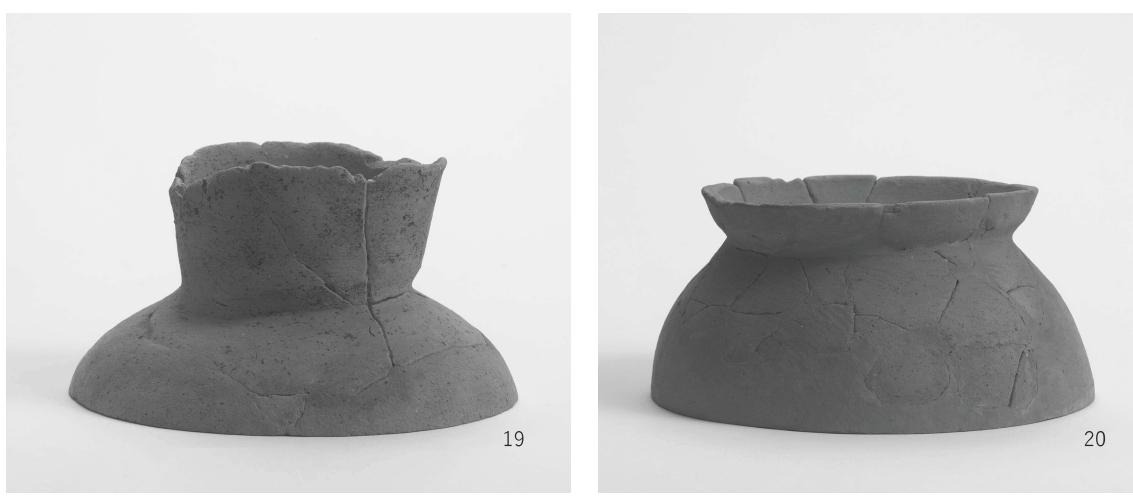
5. SB101 出土土器 (4)

図版8



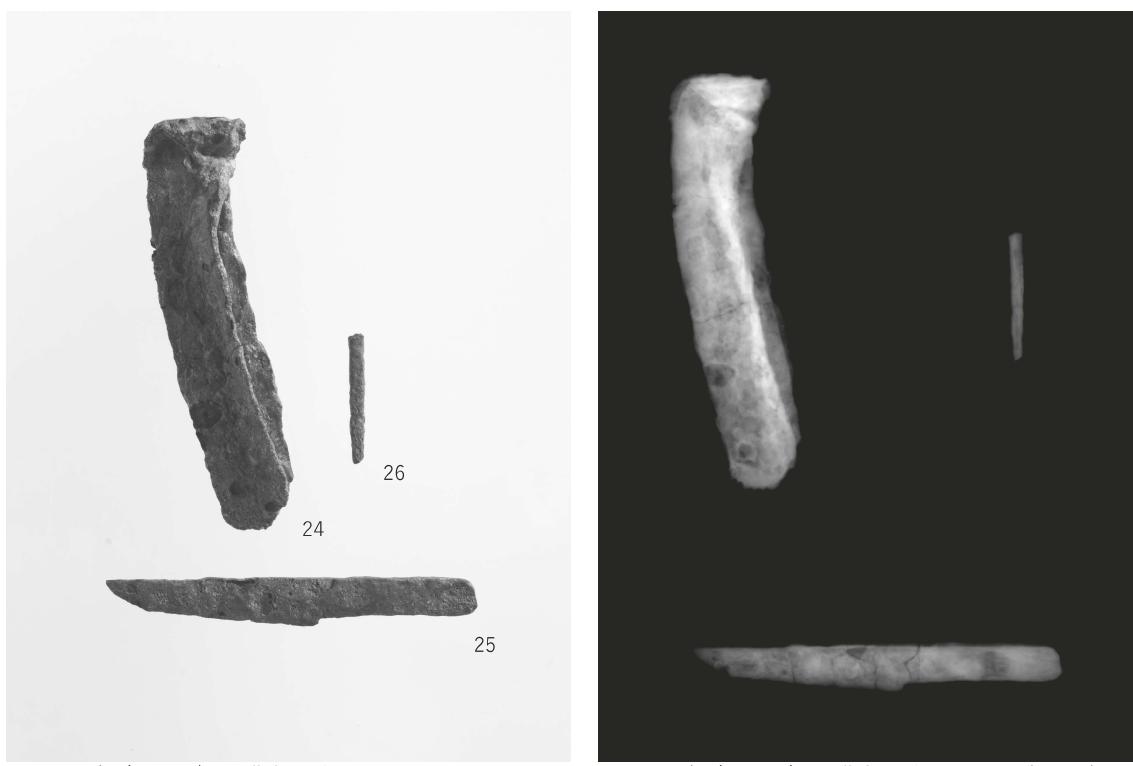
1. 1号墳（SZ301）周溝出土土器（1）

2. 1号墳（SZ301）周溝出土土器（2）



3. 1号墳（SZ301）周溝出土土器（3）

4. 1号墳（SZ301）周溝出土土器（4）



5. 1号墳（SZ301）周溝出土鉄器

6. 1号墳（SZ301）周溝出土鉄器レントゲン写真

図版9



1. 1号墳(SZ301)周溝出土埴輪



2. 第2遺物包含層出土土器



3. 第4遺構面出土土器



4. SB401出土土器(1)



5. SB401出土土器(2)



6. SB401出土土器(3)



7. SB401出土台石



8. 第4遺構面出土石器

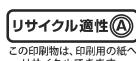
報 告 書 抄 錄

ふりがな	すみよしみやまちいせき だい 56 じ はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	住吉宮町遺跡 第 56 次 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	中井菜加・小野寺洋介（編）、内藤俊哉・田島靖大							
編集機関	神戸市文化スポーツ局							
発行機関	神戸市							
所在地	〒 650-8570 神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号 TEL 078-322-5799							
発行年	西暦 2024 年 3 月 29 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
住吉宮町遺跡	ひょうごけん こうべし 兵庫県神戸市 ひがしなだくなみよしみやまち 東灘区住吉宮町 7 丁目 2 番 6 号	28101	01-39	34° 43' 6"	135° 15' 33"	20210301 ～ 20210618	310m ² (のべ 1,060m ²)	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
住吉宮町遺跡	集落跡	平安時代、古墳時代、弥生時代	古墳・周溝墓・箱式石棺・ 竪穴建物・ 掘立柱建物・ピット・土坑・ 溝	土師器 須恵器 弥生土器 石斧				
要約	<p>弥生時代後期、古墳時代中期、飛鳥時代、平安時代の 4 時期の遺構および遺物を検出した。 弥生時代後期の竪穴建物を 1 棟検出し、遺構内から土器や石器が出土した。住吉宮町遺跡において弥生時代の竪穴建物の検出事例は多くはない、当該期の集落域を推測するための良好な資料といえる。 古墳時代中期の古墳 2 基、箱式石棺を検出した。1 号墳は円墳と考えられ、直径は約 18 m に復元できる。墳丘全面に葺石を葺いており、墳丘自体の残存状況は良好であった。2 号墳は 1 辺 8 m の方墳である。1 号墳・2 号墳ともに築造時期を推定できる遺物の出土はなかった。住吉宮町遺跡では、これまでに 81 基の古墳と、15 基の箱式石棺が確認されており、当遺跡内の古墳群の様相を明らかにするうえで重要な成果となつた。</p> <p>飛鳥時代の竪穴建物を 1 棟、掘立柱建物 1 棟を検出した。竪穴建物は北側にカマドを備え、カマド周辺からは土器がまとめて出土した。</p> <p>平安時代の鋤溝および溝、ピットを検出した。鋤溝が多いことからこの時期は耕作地であったものと考えられる。</p> <p>以上のように、本遺跡が連綿と人々が居住した遺跡であることが改めて確認され、各時代ごとの利用方法が明らかにできる良好な調査成果を得たといえる。</p>							

住吉宮町遺跡 第 56 次 発掘調査報告書

2024 年 3 月 29 日

発 行 神戸市文化スポーツ局文化財課
神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号
TEL 078-322-5799
印 刷 株式会社 旭成社
神戸市中央区琴ノ緒町 1 丁目 5 番 9 号
TEL 078-222-5800



この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

